

十全同窓会会報

(題字：佐藤保十全同窓会会長)

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷/ヨシダ印刷(株)

平成二十五年度 十全同窓会総会開催

加藤 聖

平成二十五年度の十全同窓会総会が去る七月六日(土)午前十時より、医学部記念館において開催された。今回は、十三支部の代表が出席された。まず佐藤保同窓会長よりご挨拶がありその中で、昨年の医学部百五十周年の記念事業や図書館改築への同窓会からの支援に対し会員一同への感謝が述べられた。続いて議長に佐藤会長を選出し、始めに五十五名の物故会員に黙祷を捧げた後、議事に入った。まず、加藤理事長より平成二十四年度



の会務報告が行われ、次に、山本博医学系長より、医学系報告が行われた。引き続き第十一回高安賞の贈呈式に移り、最優秀論文賞 吉田耕太郎博士(経血管診療学)、優秀論文賞 岡田光博士(恒常性制御学)、保野由紀子博士(分子移植学)の三名の方々に表彰状と盾が山本博医学系研究科長より授与された。次いで山本健医学類長より医学類報告が行われた後、佐藤会長により十三支部より出席された各代表の紹介があった。その後議案審議に移り、大井会計理事から平成二十四年度会計決算報告が、森紀喜監事より監査報告がなされた。引き続き大井会計理事より平成二十五年度予算案の説明があり、拍手で承認された。次に役員改選の報告がされ、正橋剛二監事が退任され高櫻英輔(昭和四十年卒業)監事の就任が、また蒲田敏文(昭和五十八年卒業)理事の新任が了承された。次いで、山本健医学類長より医学部正門から十全講堂正面までの

プロムナード建設及び記念館の改修・周辺整備の来年度予算の説明があり、それに関して加藤理事長より大学本部から同窓会に対して二部寄付の依頼があった旨、報告があり、審議の結果全員一致で寄付が了承された。続いて医学部学生の課外活動(西医、白山診療班、立山診療班、ACLS金沢、Live Aid KANAZAWA、医学展グループ代表に支援金目録の贈呈が佐藤会長より行なわれ、閉会となった。総会に続き教授就任講演が午前十一時十分より行われた。最初に中村信一学長の司会のもと、土屋弘行教授(機能再建学 旧整形外科)が「骨肉腫に対する挑戦」と題して講演され、続いて古川侃副学長の司会のもと、川尻秀一教授(細胞浸潤学 旧歯科口腔外科)が「口腔癌の浸潤像と悪性度に関する臨床ならびに基礎的研究―高悪性4D型癌の克服を目指して―」と題して講演された。両先生の最新の研究成果に聴衆一同魅了された。講演会終了後、場所を移し十二時十分より懇親会が催された。佐藤会長の挨拶から始まり、次いで能登支部の佐原先生のご発声による乾杯の後、小森副会長から日本医師会の活動状況についてご報告があった。和やかな内に交歓の会が進行し、各支部代表によるご挨拶及び支部の近況報告もなされ、午後一時四十分盛會裏に閉会した。



目次

平成二十五年度 十全同窓会総会開催	1
医学部創立百五十周年記念事業の 進捗状況	3
教授就任挨拶	4
総会記事	6
教授就任講演	8
十全学術行脚	10
受賞	12
学会報告	13
金沢大学関連病院院長会議	16
御遺骨返還式・合同慰霊祭	16
論説	17
病院紹介	18
教室だより	20
支部だより	22
クラス会	25
同窓会の消息	26
医師会コーナー	26
平成二十五年度オープンキャンパス	27
十全歴史ひろば	28
十全昔話	29
学生コーナー	31
ホームカミングデイ	32
二〇二三年度医学展開催に向けて	32
編集後記	32

物 故 会 員

(平成24年7月1日～平成25年6月28日)

福田 正二郎	昭和十五年卒業	浅井 俊昭	昭和二十九年卒業
土屋 重義	昭和十八年卒業	鈴木 善忠	昭和三十年卒業
許 書劍	昭和十九年卒業	森本 眞平	昭和三十一年卒業
山本 裕弘	昭和十九年卒業	豊田 務	昭和三十二年卒業
富永 讓介	昭和十九年専卒業	田中 勤也	昭和三十二年卒業
中田 蔵之助	昭和二十年卒業	河村 基	昭和三十二年卒業
壺井 敏男	昭和二十年卒業	寺田 富士雄	昭和三十三年卒業
加々美 孝嗣	昭和二十二年卒業	伊藤 俊夫	昭和三十六年卒業
金子 富夫	昭和二十三年卒業	吉村 卓也	昭和三十六年卒業
橋本 外喜三	昭和二十三年卒業	仲村 肇	昭和三十七年卒業
神人 澄	昭和二十三年専卒業	河本 健	昭和三十七年卒業
工藤 義雄	昭和二十三年専卒業	田中 久米夫	昭和三十七年卒業
高野 晃一	昭和二十四年卒業	長井 良彦	昭和三十八年卒業
浮田 鎮	昭和二十四年卒業	水野 良一	昭和三十八年卒業
宮地 秀樹	昭和二十四年卒業	武田 公男	昭和四十六年卒業
泉 永吉	昭和二十四年専卒業	北野 英一	昭和四十六年卒業
加藤 徹	昭和二十四年専卒業	堀川 征機	昭和四十七年卒業
塩谷 大策	昭和二十四年専卒業	神田 敬夫	昭和五十三年卒業
藤田 光一郎	昭和二十四年専卒業	窪田 孝	昭和五十三年卒業
小篠 築	昭和二十五年卒業	島 伸嘉	平成十五年卒業
坪口 昇	昭和二十五年卒業	稲積 達郎	平成二十一年卒業
岩佐 清	昭和二十五年卒業	杉田 直道	大学院卒業
杉山 富彦	昭和二十五年卒業	坊 久雄	II 会員
長沢 宏治	昭和二十五年卒業	平野 秀一	II 会員
田原 一夫	昭和二十五年専卒業	宗像 秀雄	II 会員
長治 善嗣	昭和二十五年専卒業	白澤 榮一	II 会員
石田 宗治	昭和二十六年卒業	久城 正彦	II 会員
久保 善一	昭和二十九年卒業	木戸 外喜夫	II 会員
馬場 延治	昭和二十九年卒業	山本 正勝	II 会員

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
 会員のご不幸は当会にご一報お願いいたします。

創立百五十周年記念事業の進捗状況

百五十周年記念事業実行委員長・医学類長 山本 健

本学医学部創立百五十周年記念事業は、昨年七月に記念シンポジウム、記念式典・祝賀会の挙行、金沢医学館第一期生を題材にした記念モノメント「医の源流 未来への継承」の建立を実現し、百五十周年記念誌を刊行することができました。十全同窓会会員各位の絶大なるお力添えに、篤く御礼を申し上げます。

当初計画しておりました記念事業のうち、残っているのは「医学部記念館の改修工事」と「メインプロムナードの整備事業」の二つで、これらは予算規模から見ても桁違いに大きな事業です。記念事業実行委員会の方針は、まず記念式典関連事業と記念誌刊行を優先し、その上で予

算が残れば、それを記念館の改修やメインプロムナード整備に充てる心積りでございました。各位からご寄付を賜りました浄財は、現時点で約六千四百万円が残っております。一方で、施設部による必要経費の見積りは、メインプロムナード整備のみで一億円を要すること



図1 メインプロムナード整備イメージ

で、医学部正門から十全講堂に至るメインプロムナード(図1)のうち、約六割の整備で資金が底を突くことになりました。どうしたものかと頭を悩ませていたところ、三つの天恵がありました。

一、中村信一学長・古川侃副学長と金沢大学施設部から、平成二十六年度文科省概算要求(施設整備費補助金に「記念館の改修工事」と「メインプロムナードの整備事業」を一体として申請する(図2)とお知らせをいただきました。国からの交付金が減少する一方の昨今、大型の概算要求には「自助努力」と「国以外の団体との協働」が求められます。

二、まず「自助努力」について、一億円の自己資金が準備できるよう、不足分は十全同窓会にお願いを申し上げ、同窓会理事会と總會のご承認をいただくことができました。三、次に「他団体との協働」については、金沢市から、石引の広見と、医学部・病院前の側溝を一体化した遊歩道整備のご提案が数年前にありましたが、その後足踏み状態が続いていました。ところが平成二十五年度の金沢市予算に遊歩道整備事業(正式名「石引一丁目線道路改良事業」)の設計費用が計上され、にわか

多様な財源によるパブリックスペースの再生 (金沢市+自己財源+国費)

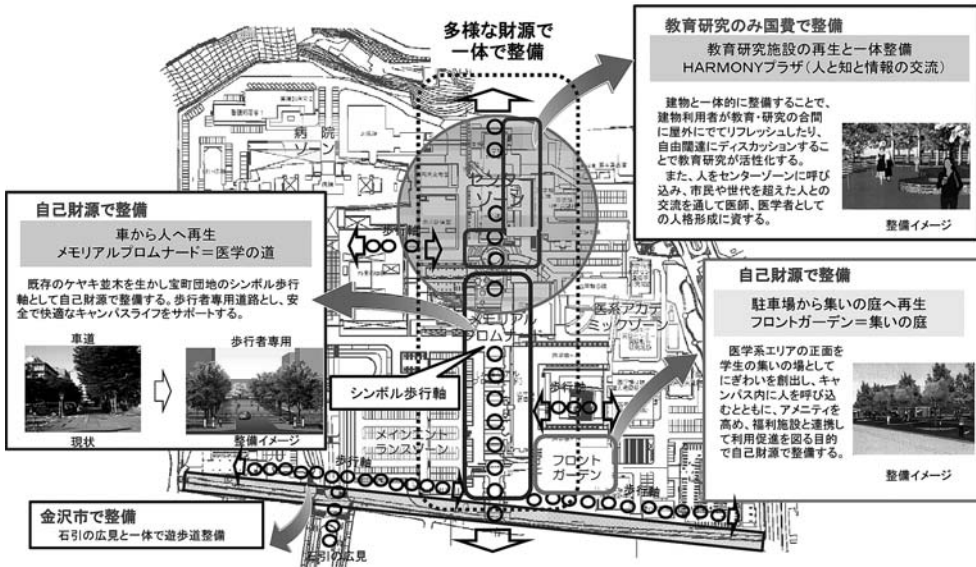


図2 文科省への概算要求案 「多様な財源によるパブリックスペースの再生」

平成二十六年度には、他大学からも同様の施設整備要求が十件程度申請される見込みとのことですので概算要求の採択については予断を許しませんが、高額の自助努力と地方自治体との協働を揃えることのできる大学はそう多くはないであろうと期待しています。概算要求に対する政府原案提出は十一月、「内示」は十二月末の予定です。来春、吉報をお届けできることを心待ちにしております。

教授 就任 挨拶

蒲田 敏文博士 (昭和五十八年卒業)

経血管診療学教授に就任



この度、平成二十五年六月一日付で、本学大学院医薬保健学総合薬保健学総合研究科経血管診療学(旧放射線医学)分野の教授に就任いたしました。伝統ある金沢大学放射線医学教室の運営を引き継ぎ、さらに発展させていかなばならない職責の重さを痛感しております。

質的向上にとつて非常に重要であると考えています。最新の診断あるいは治療機器を導入し、最先端の診療が行えるように努力してまいります。また、金沢大学放射線科は北陸三県の基幹病院の多くに常勤医を派遣し、関連病院の診療を支えております。今後も北陸の放射線診療のさらなる発展のために、次世代の優秀な放射線科医の育成にも全力で取り組んでいく所存でございます。金沢大学十全同窓会の先生方にはご指導とご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

私は昭和五十八年に金沢大学医学部を卒業後、本学の旧放射線医学教室に入局以来、消化器の画像診断とIIR(interventional radiology)を中心に研鑽をつんでまいりました。平成九年にはアメリカ合衆国のトーマスジェファソン大学放射線科に留学し、消化器疾患のMRI診断の研究を行いました。帰国後は脾臓とくに脾癌の早期のための画像診断法の開発をテーマとして臨床と研究を行ってまいりました。今後は診断のみならず脾癌の生存率向上を目指した集学的治療(放射線治療、化学療法、動注塞栓療法など)についても臨床科と連携して取り組んでいきたいと思っております。

放射線診療の充実は大学病院の診療の

本学医薬保健研究領域保健学系
医療科学領域病態検査学教授に就任
森下 英理子博士 (会員Ⅱ)



高味 良行博士 (平成元年卒業)

関西医科大学附属滝井病院 心臓血管外科病院教授に就任



本年六月一日付けで関西医科大学附属滝井病院心臓血管外科病院教授を拝命致しました。私は平成元年に本学卒業後、名古屋掖済会病院にて臨床研修後、名古屋大学胸部外科教室に入局し、心臓外科医として研鑽を積んで参りました。この専門領域の選択には、本学在学中に憧れました岩 喬第一外科教授の颯爽とした診療姿勢が大きく影響致しました。名古屋大学在任中には、米国ペイ

ラー医科大学に留学する機会を得ました。能勢之彦教授の御指導の下、血液遠心ポンプの研究開発に従事し、その成果として、現在世界中で臨床使用されている京セラ株式会社製「ジャイロポンプ」を世に出すことができました。帰国後、上田裕一教授に査にて名古屋大学より医学博士号を取得、春日井市民病院・名古屋第二赤十字病院を経て、この度、新たな心臓血管外科を創る命を受け、滝井病院に着任致しました。これまで、十全同窓会愛知県支部の幹事として、同窓の方々と多くの交流を持たせて頂きました。この度、縁あって乗り込むことになりました大阪でも、本学卒業生としての誇りを持つて、臨床・研究・教育に動かしめる高みを目指しますので、今後ともご指導・鞭撻頂きますようお願い申し上げます。

久慈 一英博士 (平成二年卒業)

埼玉医科大学医学部 国際医療センター 放射線科(核医学科) 教授に就任



平成二十五年六月一日付で埼玉医科大学医学部国際医療センター放射線科(核医学科)教授を拝命致しました。私は平成二年に金沢大学医学部を卒業後、金沢大学核医学講座入局と同時に大学院医学研究科へ進みました。優秀な諸先生の薫陶を受けながら、広く臨床核医学を実践し学ぶと共に核医学研究に携わることができました。大学院修了後も核医学診療科スタッフとして従事し、金沢大

学には学生時代と合わせて約二十二年の長い間お世話になりました。埼玉医科大学の三つめの大学病院である国際医療センターを開設するというところで、平成十六年に埼玉医科大学に参りました。国際医療センターには、PET用検査薬剤が合成可能な、サイクロトロンを含む本格的核医学施設があります。最近の医療事情を反映して、当院は癌患者数全国第五位になるなど急成長を遂げています。このたび、ご栄転された松田博史前教授の後任を引き継いで、核医学科の核医学診療、教育、研究全般を担当することになりました。歴史ある金沢大学核医学の伝統を受け継ぎながら、埼玉医科大学核医学を発展させていきたいと思っております。十全同窓会諸先生のご指導とご鞭撻を賜りますように宜しくお願い申し上げます。

藤原 浩博士

分子移植学教授に就任



このたび六月十六日付で井上正樹前教授の後任として京都大学より金沢大学の産科婦人科学教室の十二代目の教授に着任いたしました。

私は広島生まれで父の仕事の関係で高時代を水戸で過ごしました。京都大学に進学してからは主に京都に住んでいましたが、途中、彦根市民病院と日赤和歌山医療センターに赴任しています。今回金沢に参りまして、歴史ある城下町との縁を感じております。産婦人科は周産期学、婦人科腫瘍学、生殖医学および女性医学の四つの領域からなりますが、私は主に生殖医学を専門にしてみました。産婦人科は女性の一生を対象とし、卵巣癌や子宮がんなど悪性疾患も扱っており、治療法もホルモン治療などの内科的治療と帝王切開や子宮がん手術など外科的治療まで多岐にわたっています。また他科と最も異なる特徴として新しい生命の誕生に携わっていることが挙げられます。そのような背景のもと、先代の井上教授は婦人科腫瘍学や生殖医学の領域で世界トップクラスの輝かしい研究業績を挙げてこられました。こ

これらの成果をさらに発展させていければと考えております。

現在残念ながら北陸地方は次世代を担う若い産婦人科医が不足している状況にあります。そこで前述したような産婦人科学領域の特徴を教育の場でもアピールして興味を持った学生に産婦人科の道を考えていただきたいと願っております。また関連病院との連携を深めて諸先輩の達成されてきた成果をより効率的に次の若い世代に伝承できる研修システムを構築して若者が集う魅力ある教室作りを推進し、産婦人科を目指す多くの研修医が北陸の地に集まってくるような環境を提

供したいと思っております。微力ですが、精一杯教室と北陸の産婦人科医療の発展に寄与したい所存です。これからどうか宜しくお願いいたします。



長谷川 稔博士 (平成三年卒業)

福井大学医学部 感覚運動医学講座 皮膚科学教授に就任



平成二十五年六月一日付で、福井大学医学部皮膚科学教授として赴任いたしました。金沢大

学医学部を卒業し、平成三年に金沢大学皮膚科学教室に入局しました。専門の全身性強皮症は、皮膚や内臓臓器が線維化により硬くなる膠原病です。また、末梢循環障害が強く、レイノー現象や指尖部に潰瘍を高率にきたします。その予後を改善させるため、毛細血管顕微鏡を用いた早期診断方法

の確立、そして予後の予測に有用なバイオマーカーの特定を行ってきました。また、竹原和彦教授から米国Duke大学免疫学教室(Thomas Tedder教授)に留学

松村 正巳博士 (II会員)

自治医科大学地域医療学センター 総合診療部門教授に就任



この度、平成二十五年九月一日付で、自治医科大学地域医療学センター総合診療部門教授

を拝命いたしました。私は、昭和六十一年に自治医科大学を卒業し、出身県である石川県に戻ってまいりました。平成二年からは竹田亮祐先生が主宰されていた旧第二内科に入局させていただきました。馬淵宏教授指導のもと、平成九年に学位をいただくことができました。平成十八年からは山岸正和教授のもと附属病院

特任助手に採用いただきました。平成二十二年からは新設された医学教育研究センターの准教授として、医学生への臨床教育に専念させていただきました。この間、直にご指導いただいた歴代の医学系長、医学類長の先生方をはじめ、私は良き指導者に恵まれ、本学において貴重な経験をさせていただきました。篤く御礼申し上げます。私は医学部卒業後、プライマリ・ケアを実践する中で、内科学、その中でも腎臓病学、リウマチ・膠原病学の研鑽を積んでまいりました。今後は初心に立ち返り、総合内科医として診療・教育・研究をおこなって行く予定でございます。栃木県下野市と、金沢からは遠く離れますが、十全同窓会の諸先生方には、より一層のご指導ご鞭撻を賜りたく、何卒宜しくお願い申し上げます。

総会記事

平成二十四年度決算報告ならびに
平成二十五年度予算について

平成二十四年度決算

表1に一般会計の決算書を示します。
会費収入は、名簿改訂年にも拘らず見込みに届きませんでした。雑収入ではDVD頒布に係る分配金が収入となっています。支出では、事業費が増額となりました。

十全同窓会会報の特別号が二冊発行されたことなどがその理由です。補助費は記念館整備が必要とされなかったためその分減少しました。医学展へは、百五十年を迎えた年の開催として補助金を増額しました。予備費からは創基百五十年記念式典祝儀、その他を支出しました。

全体としては、会費収入減で、百五十年周年記念にかかわる事業費増のため、基金への繰り込みは断念しました。また当面の運転資金確保のため二百万円を基金より繰り入れました。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は、資産運用で得た利息のみです。また本学図書館からの要望を受け、医学系から依頼のあった図書館分館改築への寄附三千万円を実行しました。名簿作成会計では、免除会員の先生方・企業からの賛助が収入となっています。高柳奨学金会計は、平成二十三年度の奨学生二名に対して支給しました(表2〜5参照)。以上の決算報告に対して森監査理事から会計監査報告がなされ承認されました。

平成二十五年度予算

表6をご覧ください。会費収入は例年落ち込みが続きますが、努力目標を計上

しました。

支出では例年並とし、学生課外活動や図書館などの課外活動・整備補助を、事務費には事務局パソコン一式予算を計上しました。基金への繰り込みに関しては会費の収入率が回復し、一般会計が軌道にのるまで調整した額としました。

小泉基金

平成二十三年度に決定したとおり、金額を医学部創立百五十年周年記念事業へ寄附しました。
(会計担当 大井 章史 記)

会計監査報告書	
平成24年度 金沢大学医学部創立2・3百年祭小泉基金	
上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証拠書類に關連がなく、現在高についても相違ないことを確認した。	
平成25年2月18日	
監事	正橋剛二
監事	中尾真二
監事	森 紀吾

会計監査報告書	
平成24年度	金沢大学医学部十全同窓会会計
	金沢大学医学部十全同窓会基金会計
	十全同窓会会員名簿作成会計
	高柳奨学金会計
	金沢大学医学部歴史会計
上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証拠書類に關連がなく、現在高についても相違ないことを確認した。	
平成25年2月18日	
監事	正橋剛二
監事	中尾真二
監事	森 紀吾

(表1) 平成24年度決算書

自 平成24年 1月 1日
至 平成24年12月31日

取 入			支 出			
科 目	予算 (円)	決算 (円)	科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	1,924,381	1,924,381	事 業 費	8,186,972	8,513,627	会報・特別号印刷製本代 3,900,110 会報・アカンサス発送代 1,529,122 会費払込用紙・発送用封筒代 246,550 アカンサス印刷代 46,800 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 150,000 学生課外活動支援 (西医体) 100,000 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 279,972 @ 2,772×101 本 1,861,073 会報デジタルアーカイブ 0 ホームページ「会員情報変更受付」情報修正 0 ホームページメンテナンス (2回/年) 0 会報製本代 (No116 ~ No150) 0
会 費 取 入	13,592,000	12,462,000	旅 費	1,000,000	1,097,730	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 1,097,730 会報取材旅費等
雑 取 入	0	114,192	会 議 費	400,000	163,603	総会、理事会、会報編集委員会、反省会 163,603
十全同窓会基金からの繰入	0	2,000,000	慶 弔 費	100,000	21,310	弔電・生花 21,310
			補 助 費	710,000	639,040	記念館展示室整備 0 図書館医学部分館整備補助 299,040 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 医学展補助 200,000 Live Aid Kanazawa 70,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングデイ開催負担金 0
			事 務 費	3,350,000	3,130,052	会費払込料金、EPSON プリンター・感亮体・トナー、780,052 通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 人件費 2,350,000
			雑 費	60,000	60,000	会報袋詰め作業代 60,000
			支部への補助費	500,000	400,000	11 件 400,000
			基金への繰込み	0	0	十全同窓会基金口座へ 0
			予 備 費	1,209,409	364,290	デジタルカメラ一式、創基150年記念式典祝儀、364,290 アルバイト謝金、その他
			繰 越 金		2,110,921	
計	¥15,516,381	¥16,500,573	計	¥15,516,381	¥16,500,573	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成24年 1月 1日
至 平成24年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	138,405,676		図書館分館改築への寄付	30,000,000	
繰 入 金	0		一般会計への繰入	2,000,000	
利 息	836,113 29,617 45,127	外国公社債(シルフリミテッドシリーズ) 利付き国債 北陸銀行大口定期預金			
計	139,316,533		計	32,000,000	残高 ¥107,316,533

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成24年 1月 1日
至 平成24年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
繰 越 金	2,269,281		事 務 費	413,265	払込手数料、名簿掲載確認届・依頼文章印刷費
協 賛 金 I	3,800,000	免除会員協力@5,000×760件	通 信 費	184,787	名簿発送料、郵便料、調査費
協 賛 金 II	75,000	企業協賛@25,000×3社	謝 儀 金	510,000	
			会 議 費	42,540	
計	6,144,281		計	1,150,592	残高 ¥4,993,689

(表4) 高柳奨学会会計報告書

自 平成24年 1月 1日
至 平成24年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	6,185,964		奨 学 金	150,000	H23年度 奨学生2名 (25,000円/1ヶ月) 平成24年1月～平成24年3月分
利 息	1,444	定期預金利息			
計	6,187,408		計	150,000	残高 ¥6,037,408

(表5) 金沢大学医学部史会計報告書

自 平成24年 1月 1日
至 平成24年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	3,319,405		—	0	
利 息	800	定期預金利息			
雑 収 入	0				
計	3,320,205		計	0	残高 ¥3,320,205

(表6) 平成25年度予算書 (案)

自 平成25年 1月 1日
至 平成25年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	2,110,921		事 業 費	6,016,972	会報印刷製本代 2,850,000 会報・アカンサス発送代 1,600,000 発送用封筒代・会費払い込み用紙 270,000 アカンサス印刷代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 150,000 学生課外活動支援 (西医体) 300,000 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 279,972 @ 2,772×94 本 ホームページメンテナンス (2回/年) 25,000 ホームページ情報更新 (12回/年) 50,000 会報製本 (No.116-No150) 2冊 42,000
会 費 取 入	12,192,000	25 年度会費 6,000,000 4,000 円 × 1500 人 過年度分 5,100,000 平成 25 年度以降会費 400,000 華会員会費 672,000 6,000 円 × 112 人 4,000 円 × 5 人 20,000	旅 費	1,000,000	各支部総会への出張費、 1,000,000 各県支部長総会招待旅費、会報取材旅費
			会 議 費	400,000	総会、理事会、編集委員会、反省会 400,000
			会 費 取 入	100,000	香典・弔電等 100,000
			補 助 費	640,000	記念館展示室整備 100,000 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 Live-Aid Kanazawa 100,000 医学展 50,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングデイ開催負担金 20,000 会費払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、1,300,000 パソコン一式、通信費、証明書発行手数料、文具、 振込手数料、超過勤務等 2,350,000 人件費 60,000 会報袋詰め作業代 (年3回分) 60,000
			事 務 費	3,650,000	謝金、その他
			雑 費	60,000	
			支 部 へ の 補 助 費	500,000	
			基 金 へ の 繰 込 み	0	
			予 備 費	1,935,949	
計	¥14,302,921		計	¥14,302,921	

口腔扁平上皮癌の浸潤像と悪性度に関する臨床ならびに基礎的研究——高悪性4D型癌の克服を目指して——

細胞浸潤学(歯科口腔外科学) 教授 川尻 秀一

一、はじめに

口腔癌の約八十%は扁平上皮癌である。現在の五年生存率は約七十%であるが、一口に口腔扁平上皮癌といってもその性格は実に様々で、良性腫瘍と変わらないような大人しい癌もあれば、悪性極まりないアグレッシブな癌もある。癌を治療する際には、その癌の性格をよく理解し、予後を予測して治療計画を立てる必要がある。そこで、これまで様々な予後予測因子が検討されてきた。中でも浸潤像の観察は口腔癌の予後を予測する因子として重要である。

二、浸潤像と予後との関係

病理組織像から予後を推定する方法は一九七三年にJakobssonが、分化度、浸潤様式、細胞分裂、リンパ球浸潤など八因子をそれぞれ独自の方法で点数化し、癌の悪性度や予後を予測する方法を報告している。その後Yamamotoらは五グレードの浸潤様式を発表した。また、その中でも最も高悪性の浸潤様式4D型癌は五年生存率が二十五〜四十%で特に予後が悪いことが知られている。そこで私は、浸潤機序の解明が口腔癌の治療成績の向上につながるものと確信し基礎的研究を併せて行っている。

三、浸潤モデルの開発

浸潤像の研究を行う際には、それを再現するためのモデルが必要である。しかし、口腔領域では有用なモデルに乏しく、忠実に生体での現象を再現できるものはなかった。そこで、ヌードマウスの口腔内に口腔癌を移

植する正所性移植法を用いた*in vivo*の浸潤・転移モデルを作製したところ、このモデルにおいては臨床における浸潤や転移の病態を忠実に再現できることが判明した。またコラーゲンゲル中に線維芽細胞を包埋した*in vivo*の浸潤モデルや、ハムスターの舌癌モデルにおける浸潤像の研究も行っている。

四、各種biological markerの発現と口腔癌の予後との関係

近年、免疫組織化学染色を用いた各種のbiological markerの発現と予後との関連に関する研究が多数報告されるようになってきた。また、遺伝子研究の急速な発展とともに、患者や癌細胞の遺伝子に関する研究も増えている。ここでは、免疫組織学的検査で予後との関係が認められたいくつかのbiological markerについて紹介する。

癌細胞の不死化と異常な増殖が癌発生のファーストステップと言われているが、これに関係するものとして増殖細胞核抗原(PCNA)、変異型の癌抑制遺伝子p53およびp21、アポトーシス抑制遺伝子bcl-2とアポトーシス促進遺伝子baxについてその発現と予後との関連性を検索した。その結果、PCNA陽性細胞率および変異型p53の陽性細胞率が高率になるほど予後は不良であった。

癌細胞間の接着に関してはDesmoglein, E-cadherin, β-cateninを、癌細胞と間質との接着に関してはIntegrin β1, Integrin α3を検索した。その結果、予後不良の症

例で、細胞間接着分子の発現が消失傾向にあった。Integrinに関してはIntegrin β1が腫瘍巣周囲での発現低下を認め、予後との相関を認めた。

間質を破壊する重要な酵素であるマトリックスメタロプロテナーゼ(MMP)およびウロキナーゼ型プラスミノノーゲンアクチベーター(MMP)について発現を検討した。その結果、MMP-2, MMP-13, MMP-14, MMP-17, MMP-19, MMP-20, MMP-21, MMP-23, MMP-24, MMP-25, MMP-26, MMP-27, MMP-28, MMP-29, MMP-30, MMP-31, MMP-32, MMP-33, MMP-34, MMP-35, MMP-36, MMP-37, MMP-38, MMP-39, MMP-40, MMP-41, MMP-42, MMP-43, MMP-44, MMP-45, MMP-46, MMP-47, MMP-48, MMP-49, MMP-50, MMP-51, MMP-52, MMP-53, MMP-54, MMP-55, MMP-56, MMP-57, MMP-58, MMP-59, MMP-60, MMP-61, MMP-62, MMP-63, MMP-64, MMP-65, MMP-66, MMP-67, MMP-68, MMP-69, MMP-70, MMP-71, MMP-72, MMP-73, MMP-74, MMP-75, MMP-76, MMP-77, MMP-78, MMP-79, MMP-80, MMP-81, MMP-82, MMP-83, MMP-84, MMP-85, MMP-86, MMP-87, MMP-88, MMP-89, MMP-90, MMP-91, MMP-92, MMP-93, MMP-94, MMP-95, MMP-96, MMP-97, MMP-98, MMP-99, MMP-100の発現と予後との相関を認めた。

固形腫瘍が増大する際には栄養血管が必要である。そこでICTOA抗体、CD34抗体による血管の免疫組織化学染色、およびリンパ管のLYVE-1抗体、D2-40抗体による免疫組織化学染色を行い、その密度と浸潤様式との関係について検討した。その結果、血管密度は予後不良症例で減少する傾向があり、浸潤様式4D型では最も低値を示した。また、リンパ管密度については、リンパ節転移や予後と相関は認められなかった。高悪性癌では脈管内皮細胞増殖因子(VEGF)の発現やVEGFレセプターが上昇していることが明らかとなった。浸潤様式4D型の癌はこのような低酸素の環境に適応する能力が非常に高い癌であると考えている。

五、高悪性4D型癌の克服を目指して

口腔扁平上皮癌で最も高悪性である浸潤様式4D型の癌は視診型が腫瘍硬結型で、表面の粘膜はほぼ正常、一部に潰瘍か線状瘻痕が見られるのみで、触つてはじめて深部に強い硬結を触れ、異常に気付く。見た目だけでは癌かどうかさえ分かりにくく、癌の範囲も不明瞭である。このタイプの癌はスキルス胃癌と類似し

た性質で、癌細胞周囲に大量の間質を生じ予後も非常に悪い。最近のわれわれの研究で、浸潤様式4D型の癌細胞周囲の間質は浸潤をサポートするCancer associate fibroblast (CAF)を多く含むことが証明されている。この高悪性の癌の克服を目指して、拡大切除や頸部リンパ節予防廓清の他、全摘生検を行ってきた。また、通常の化学療法では効果に乏しいから、間質の線維芽細胞増殖抑制剤の効果を浸潤モデルを用いて実験的に効果を検討している。

一昔前、癌は不治の病として恐れられていた。口腔癌もその例外ではなかった。今回様々な予後因子について紹介したが、何より重要な予後因子は、治療の最前線に患者と接している多くの医療関係者の「熱意」であるように思われる。今後さらに口腔癌の治療成績の向上を目指し、臨床・研究を重ねて行く所存である。

表. 口腔扁平上皮癌の高悪性4D型癌の特徴

1. 予後が非常に悪い
2. リンパ節転移率が非常に高い
3. 腫瘍の肉眼所見は腫瘍硬結型が多い
4. 癌細胞の増殖能が非常に高い
5. 癌細胞の細胞間接着が弱く、運動能が高い
6. 基質分解酵素の産生が旺盛で基底膜が消失している
7. 腫瘍の間質成分が多く、スキルス癌と類似
8. 間質の線維芽細胞が浸潤をさらに誘導している
9. 血管密度は低く、腫瘍は低酸素状態である
10. 抗癌剤・放射線治療に抵抗性である



福井大学医学部は、昭和五十五年前身の福井医科大学として開学いたしました。三年半後の昭和五十八年に医学部附属病院が開院、昭和六十一年に大学院の設置、平成六年に高エネルギー医学研究センター、平成二十一年にこどもの発達研究センターが開設されました。この間、平成九年から看護学科が併設されております。平成十五年には福井大学と福井医科大学が統合されて、現在の福井大学医学部となりました。平成二十二年に医学部設置三十周年を迎えて、学内では再整備計画が進行しており来年には附属病院が新病棟に移転いたします。平成二十五年八月現在、福井大学医学部には教授十名、准教授三名、助教三名（計十六名）の十全同窓会関係の先生方が在籍しております。このうち、教授および准教授の先生方に学術内容をご紹介いただきました。（中本 安成 記）



一. 石崎武志教授
基礎看護学
健康科学
(昭和四十九年卒業)

現在は医学部附属図書館長と大学院医学系看護キャリアアップセンター長を併任している。卒業後旧第三内科に入局し、昭和五十八年四月故宮保進教授に従い第三内科助手より、

旧福井医科大学第三内科助手として赴任。以来、呼吸器診療に従事し、平成十八年四月から平成二十四年十一月までは呼吸内科診療科長を兼任。現在、呼吸器内科は福井県の先進的な呼吸器疾患拠点病院と位置づけられる。研究面では、摘出還流肺を用いて低酸素性肺血管収縮機序の研究とARDS肺障害を研究し、NOやEITの重要性を明らかにしてきた。中央アジアに赴き高地生息動物ヤクの肺循環特性の共同研究を遂行しRhokinaseの役割を解明してきた。教育面では我が国で最初の慢性呼吸器疾患看護認定看護師教育を始めた。平成二十四年十一月、福井市で第二十二回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会総会を主宰し、平成二十八年には第九十一回日本結核病学会総会を主宰する予定である。



二. 山口明夫教授
外科学一
(昭和五十年卒業)

平成四年に福井医科大学外科学一講座に赴任し、平成二十年より四年間病院長を務め、本年四月より医学部長を務めています。当教室には平成二年卒業の廣野靖夫助教が平成十二年より赴任しています。

専門は消化器外科学で、特に大腸癌や肝胆膵領域の癌の手術を中心に臨床に励んでいます。研究では主に大腸癌の臨床研究や消化器がんの浸潤、転移機構に関わる因子を分子生物学的に検索するなど、トランスレーショナルリサーチに取り組んできました。最近では新規の癌幹細胞マーカーとPCD4 variant formを見出し、大腸癌における治療抵抗性、細胞増殖に不可欠な因子であることを見出しました。また新しい血管新生因子としてDcncが大腸癌血行性転移と関連があることを明らかにし、当科で作製したモノクローナル抗体で腫瘍血管新生を抑制する結果が得られ、将来臨床応用へつなげるべく研究をすすめています。



三. 寺澤秀一教授
地域医療推進講座
(昭和五十一年卒業)

県内外を問わず、大学以外の施設での臨床教育にも貢献したいという長年の願いが叶い、三年前に福井県の寄付講座としてスタートしました地域医療推進講座を担当させていただくことになりました。大学の総合診療部外来や県内の病院、診療所などで、医学生、初期研修医、専門研修医の先生方と一緒に外来診療をしながら、外来での考え方や診療の仕方を現場で指導しております。また、初期研修医の先生方が研修中の県内全ての六施設に、月一回、出向カンファランスに出かけ、週末は、ほとんど毎週、全国の教育病院にカンファランスや教育講演に出かけております。また、本年度に、長年の夢だった地域総合医療学大学院コースの新設が実現し、

臨床教育医を続けながら、ERでの救急初期対応や地域医療に関する臨床研究の支援なども行いたいという念願も叶いそうで、充実した毎日を過ごしております。



四. 馬場久敏教授
整形外科学
(昭和五十二年卒業)

福井大学に平成二十一年十一月に赴任しました。専門は整形外科学・リハビリテーション科学ですが、南カリフォルニア大学留学時代からずっと継続して行ってきた脊髄・末梢神経生理学および脊髄損傷の基礎科学を研究しています。ここ十五年は厚生労働省研究班での仕事で脊柱靭帯骨化(難病)の遺伝子解析や脊髄細胞移植の研究も行っています。現在社会では移植・再生医学が注目されていますが、我々も地道に研究を推進していく所存です。



五. 和田有司教授
精神医学
(昭和五十二年卒業)

平成十一年に着任しました。講座の活動として、臨床では児童・思春期から高齢者まで幅広い領域を対象とし、研究では脳イメージングを中心に精神疾患の病態解明と新たな治療の開発をすすめています。昨年四月に病院長を拝命しました。現在、病院再整備がすすみ、その一環として来年春には新病棟が完成予定です。病院の理念である「最高・最新の医療を安心と信頼の下で」を常に忘れず、地域医療の中核としての役割を担うべく、医療連携の推進に努めています。十全同窓

会の先生方には引き続きご支援の程よろしくお願いいたします。



六. 佐藤一史准教授
手術部
(昭和五十五年卒業)
脳神経外科学教室
の出身で昭和六十一年

年、福井医科大学脳神経外科助手として赴任し、平成八年、同大脳神経外科学講師となる。以後、脳腫瘍と脊髄疾患の外科治療、脳腫瘍の病理学的研究に従事した。この間国際癌研究所(フランス)で脳腫瘍の分子生物学、ランス大学(フランス)で脳血管内治療を学んだ。平成十五年、福井大学手術部副部長(准教授)となる。現在、滅菌管理部長とME機器管理部長を兼任し、手術部、洗浄・滅菌、医療機器に関する統括業務に加え、医療安全、感染対策、ISO9001等の病院横断的活動にも携わっている。学会・研究会では、脳神経外科関連学会に加え、日本手術医学会、日本医療機器学会の役員、全国国立大学病院手術部会議常任理事、北陸中材業務・感染対策研究会代表世話人等を務めている。



七. 横山修教授
泌尿器科学
(昭和五十七年卒業)
泌尿器科学講座から平成十四年本学教授に就任した。すでに十一年が経過し、現在は診療担当の副病院長、日本泌尿器科学会理事、日本排尿機能学会理事・事務局長などを兼務。講座は排尿障害、尿路生殖腫瘍、機能障害を柱に基礎・臨床研究を進めている。特に排尿障害で

は、種々の病態モデルを用いて中枢神経から膀胱・尿道までの蓄尿・排尿機能障害の発生機序を中心に研究を行っている。また福井県の検診機関との共同研究として住民健康調査のデータを基に排尿障害の疫学研究を行ってきた。この結果は国内外で注目されている。尿路生殖腫瘍場におけるmicroRNAの発現の意義、autophagy誘導の意義、癌の局在・再発再燃に対するPETを用いた診断と早期治療効果判定を目指した臨床的・基礎的研究も行っている。また、福井県唯一の腎移植機関として脳死者からの臓器提供・移植の担当病院となっている。



八. 此下志准教授
内科学三
(昭和六十一年卒業)
第二内科の出身で竹田亮祐教授、馬淵

宏教授、東福要平保健管理センター教授等から内分泌代謝、腎高血圧領域の薫陶を受けました。平成十二年から宮森勇教授のもと福井医科大学医学部内科学(三)に助教として赴任、改組等を経て現職となっています。これまで学位、留学を通じ主としてレニン・アンジオテンシン系の研究に従事し、転写調節、糖尿病での組織発現、遺伝子多型解析、網羅的解析による新規肥満関連マーカー開発などの成果を挙げています。この間、本邦の大規模プロジェクトや国際共同研究に参画するとともに、北陸を中心に多施設共同遺伝子コホート研究体制G-DOC Study Investigators (UMIN-CTR第一五八〇号)を立ち上げ、「生活習慣病領域における遺伝的体質に基づいた新しい個別化

医療の創出」を推進しています。これらの成果は、国内外の学会での受賞など高い評価を得ています。



九. 片山寛次教授
がん診療推進センター
(昭和六十二年大学院卒業)
がん診療推進センター

ターには、通院治療センター、がん相談窓口、緩和ケアチーム、がん治療標準化部門、がん統計部門、がん患者会支援等部門があります。NSTチエアマン、栄養部長、在宅医療安全にも関わることで、病院全体が私のフィールド、早くから多職種チーム医療を行ってきました。栄養・緩和の教育研修も重要です。北陸がんプロ福大コーディネーターとしてキャンサーボードや県民公開講座、また福井県がん連携協議会研修部会長として福井県の緩和ケア研修に携わっています。外科医として手術にも参加、肝胆膵の学内外の勉強会も続けています。膀胱癌の集学的治療、がん腹膜転移の温熱化学療法、癌性腹水に対する濾過濃縮再静注機器開発などの研究を進め、腫瘍病態治療学講座の教授も兼任しています。この度日本静脈経腸栄養学会北陸支部長を拝命いたしました。とにかく多忙ですが、剣道部顧問として練習参加が楽しみです。先日西医体で女子団体優勝しました。



十. 中本安成教授
内科学二
(平成元年卒業)
第一内科の出身で服部信教授、小林健

一教授、金子周一教授のもとで消化器内科学、特に肝がんの分子免疫病態学研究所と治療法の開発に取り組み、講師を経て、平成二十三年一月より現職に着任した。附属病院における消化器内科学、光学医療診療部長を併任する。教室には消化器内科とともに神経内科の専門グループがあり、医師の総合力によって健康に貢献する、をテーマに診療、研究、教育の運営を行っている。これまでのウイルス肝炎から発がんに至るモデル系の解析やがんの免疫細胞治療に関する検討において、四つの厚労省研究班の分担研究者を務めている。樹状細胞を用いた免疫治療の開発は、金大TRセンターに端を発して、先進医療として発展することに努力している。加えて、がん進展制御研究所の向田直史教授と共同でケモカイン免疫遺伝子治療をめざしている。また日本消化器病学会や肝臓学会では英文誌のAssociate Editorを担当している。



十一. 長谷川稔教授
皮膚科学
(平成三年卒業)
平成二十五年六月

に私の故郷福井県勝山市に近い福井大学に赴任したところです。専門は全身性強皮症などの膠原病です。金沢大学では、沢山の膠原病患者さんを診察する機会がありました。福井大学ではまた膠原病の患者さんは少ないですが、徐々に集めていきたいと考えています。また、アトピー性皮膚炎や乾せんなどの皮膚炎症性疾患の診療にも力を入れています。研究面では、これまで強皮症などの膠原病、創傷治癒、悪性黒色腫など様々な皮膚疾患

受賞

平成二十五年

全国発明表彰式発明実績功績受賞

国立大学法人金沢大学長

中村 信一 (昭和四十三年卒業)

平成二十五年六月十八日、東京で行われた平成二十五年全国発明表彰式において発明実績功績賞を受賞しました。

今回の受賞は、本学の理工研究域パイオニアAFM先端研究センター長 安藤敏夫教授がオリンパス株式会社と共同で開発した「生体分子の動きも観られる高速原子間力顕微鏡の発明」が特別賞（発明協会会長賞）を受賞し、金沢大学がその開発を支援したことが認められたものです。

安藤教授の研究は、超高速で観察可能な原子間力顕微鏡（AFM）を開発し、生命活動を支える最も重要な分子であるタンパク質の様子を可視化したものです。数ナノメートルの脆いたんぱく質分子を傷付けることなく、働いている様子を従来よりも千倍も速く観察することに成功しました。この研究により従来の常識を覆す新しい発見が次々と生まれています。

金沢大学では平成二十二年にバイオAFM先端研究センターを設立し、この研究を積極的に推進しています。

また、今回の表彰では医薬保健研究域医学系の金子周一教授グループも、「血液による消化器がんの検査方法の発明」により発明賞を受賞しました。

表彰式は常陸宮殿下ご臨席の下、厳かかつ華やかに行われ、その後の祝賀会では同殿下と懇談する栄に浴しました。

本学発の発明が同時受賞したことは研究者の励みになるものであり、これを契機に産官学連携を一層推進してまいります。

平成二十五年

全国発明表彰式発明賞受賞

恒常性制御学教授

金子 周一 (昭和五十七年卒業)

この度「血液による消化器がんの検査方法の発明」により、常陸宮正仁親王のご臨席の下、平成二十五年全国発明表彰式で発明賞を受賞いたしました。十全同窓会の皆様方からお心のこもった祝辞や過分なお心づかいを頂き、誠に有難うございました。謹んで御礼申し上げます。また、これまでにご指導頂きました故小林健一教授、旧第一内科教室同門の諸先輩先生方および教室の皆様方にも深く感謝いたします。

全国発明表彰は公益社団法人発明協会が主催し、大正八年の第一回帝国発明賞表彰にはじまります。文部科学省、経済産業省、特許庁、日本経済団体連合会などの後援により優れた発明を完成した者、実用化に尽力した者、発明の指導、奨励に貢献した者を顕彰し、我が国の科学技術の向上、産業の振興に寄与することを目的としています。私たちの血液による消化器がんの検査方法の発明（特許第四九五三三四号）は末梢血液細胞の遺伝子発現の特徴が健常者と異なることを利用しています。北陸の主要な医療機関、株式会社キュービクスとの共同研究の成果から、消化器がんを感度一〇〇％、特異度八十七％で診断可能であることが分かり、現在全国の医療機関から解析依頼を受注しています。今回の受賞を励みとし、今後も日夜一層の研究を積んで日本の医療の向上に貢献致したいと存じます。今後とも皆様方のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

の病態を、遺伝子欠損マウスなどを用いて解析してきました。福井大学でも早速研究室を整備し、研究を立ち上げたところです。金沢大学時代よりもスケールの大きな研究を展開できればと思っております。福井大学の皮膚科は現在医局員が少ないので、当面は医局員を増やすことを最大の課題と考え、教室を運営していく予定です。



十二、平松活志准教授
光学医療診療部
(平成六年卒業)

務めている。第一内科の出身で小林健一教授、金子周一教授のもとで消化器内科医として研鑽を積み、肝不全患者の生体

第三十六回石川テレビ賞

子どものこころの発達研究センター

東田 陽博特任教授

この度、「自閉症の社会性障害の神経内分泌学の研究」の業績にたいして、「第三十六回石川テレビ賞」を受賞しました。同賞は教育文化、産業経済、美術工芸、スポーツなどの分野で地域社会の発展に貢献した個人や団体に贈られるもので、金沢

工業大学の泉合理事長、輪島塗の中室勝郎氏とともに平成二十五年五月二十一日にスカイホテルで贈呈式が行なわれました。オキシトシンが、ヒトの社会性行動

（すなわち信頼により成り立つ社会のあらゆる活動）を円滑に行なって行く上で、非常に大事な、体の中で作られる分

肝移植などに取り組んだ。平成九年からは第二病理に学内留学し、中沼安二教授のもとで原発性胆汁性肝硬変と胆汁中細菌成分との関わりを研究した。平成十四年からは富山県立中央病院に赴任し、野田八嗣院長のもと臨床の現場で多くのことに取り組んだ。とくに消化器内視鏡の分野において、ダブルバルーン内視鏡による小腸疾患の診断と治療や大腸腫瘍に対する大腸粘膜下層剥離術（大腸ESD）に早くから取り組み、多数の症例を経験してきた。平成二十四年十月、現職に着任後は第二内科中本安成教授のもとで消化器内視鏡診療を中心に行っている。引き続き大腸ESDおよび小腸疾患の診断と治療に携わるとともに、C型肝炎患者の免疫応答に関わるSNP解析も開始した。

子である事が判明する過程で、脳内でのオキシトシン分泌（オキシトシン産生神経細胞からの細胞外への遊離）に東田らは注目し、CD38と言う蛋白質がオキシトシン産生神経細胞から細胞外への遊離の役割を担う事、その機能が不全が相手の記憶を忘却し、社会性認識障害を示す事などを見出しました。さらに、社会性障害の病気である広汎性発達障害（自閉症）の治療に、オキシトシン補充薬物療法の可能性を示す臨床的貢献が評価されました。後日、センター内でパーテイを行ない、子どものこころの発達研究センターの活動に対する評価と考え、皆でその喜びをわかちあいました。副賞の賞金は全額、子どものこころの発達研究センターの研究の発展に、と寄付されました。

平成二十四年度(第九回) 金沢大学十全医学賞

金沢大学医薬保健研究域医学系 分子情報薬理学
毎田 佳子 (平成九年卒業)

この度、テロメア伸長酵素の新たな機能がヒトのRNAサイレンシングを司る”のテーマで、第九回金沢大学十全医学賞を受賞させていただきました。身に余る光栄に存じます。染色体の末端にはテロメアと呼ばれる特殊構造があります。テロメア伸長酵素であるテロメ

第十一回 高安賞

高安賞は平成十五年度、本学昭和三十一年卒業の臼井溢先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会(主査および副査)と専攻長等から構成される選考委員会の二段階で行われ、医学博士課程運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。平成二十五年度受賞者にはつぎの三名が選ばれた。

最優秀論文賞 吉田 耕太郎 経血管診療学(放射線医学) “Endothelial PI3K-C2α, a class II PI3K, has an essential role in angiogenesis and vascular barrier function” (血管内皮細胞においてクラスII型PI3キナーゼは血管新生および血管バリア機能に重要な役割を担う) Nature Medicine 二〇一二年十月掲載

レースはRNAを鋳型にテロメアDNAを合成しますが、この合成活性を担うのはhTERT蛋白です。私たちはhTERTがRNAを鋳型としてDNAだけでなくRNAをも合成する、すなわちhTERTにはRNA依存性RNAポリメラーゼ(RdRP)活性があることを明らかにしました。RdRPは多くのモデル生物で発現が確認されており、RdRPの合成するRNAが相補的な配列を有する標的遺伝子の転写や翻訳を抑制するRNAサイレンシングによって遺伝子発現を制御することが知られています。これまで哺乳類に

優秀論文賞 岡田 光 恒常性制御学(内科学第一) “Acyelic retinoid targets platelet-derived growth factor signaling in the prevention of hepatic fibrosis and hepatocellular carcinoma development” (非環式レチ

ノイド-NK-333は血小板由来増殖因子(PDGF- α) 過剰発現肝発癌モデルマウスの肝線維化・肝発癌を抑制する) Cancer Research 二〇一二年九月掲載
優秀論文賞 保野 由紀子 分子移植学(産科婦人科学) “Creation of immortalized epithelial cells from ovarian endometrioma” (子宮内膜症性卵巣嚢胞から分離した子宮内膜症不死化細胞株の樹立) British Journal of Cancer 二〇一二年三月掲載
平成二十五年七月六日(土)開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で山本博医学系研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。(山本 博 記)

はRdRPの存在自体が知られていませんでしたが、私たちはhTERTがRdRP活性により合成した小さなRNA(内在性siRNA)を介して標的遺伝子の発現を抑制することを明らかにしました。現在さらにhTERTのRdRP活性に関する詳細な解析を進めています。今回の受賞に際しまして、研究を共に遂行して下さった皆様、研究の機会を与えて下さった皆様、多くの指導や助言を下された皆様により感謝いたします。十全同窓会の先生におかれましては、今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第九回 黒川良安賞およびスロイス賞

医王保護者の会の支援に基づき、医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授賞式は、今年九回目を迎えた。

黒川良安賞は、卒業する学生のうちから選ばれた和田明梨さん、三輪隆志さん、竹治泰明さんの三名に対して、平成二十五年三月二十二日の学位記授与式の席上で授与された。

またスロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから選ばれた洞庭葉子さん、井上葵子さん、加治貴彰さんの三名に対して、平成二十五年六月一日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与された。(山本 健 記)

学会報告等

第十四回アジア太平洋性機能学会 (APSSM) 開催報告

平成二十五年五月三十一日から六月二日に石川県立音楽堂(コンサートホール、邦楽ホール)において、第十四回アジア太平洋性機能学会(The 14th Biennial Meeting of the Asia-Pacific Society for Sexual Medicine, APSSM)を開催させていただきました。

最近、性機能研究は勃起障害のみならず糖尿病や心血管系疾患などの内科的疾患、LOH症候群(加齢男性性腺機能低下症候群)等との関わりから、益々重要な学術分野として認識されてきました。今後もこれらの疾患の大幅な増加が予想されており、これらの課題に取り組むAPSSMの果たす役割は大きくなりつつあります。

APSSMは国際性機能学会(ISSM)の五つの支部の中で最も広い地域、最も人口の多い地域をカバーし、支部の中でも最も活発な学術活動、情報交換が行われてきました。筆者が現在APSSMのPresidentを務めていることから、今回14th APSSMを金沢に誘致しましたが、海外から二十三か国二百四十二名、国内か



ら二百七十三名のご参加をいただきました。また、南アフリカ、ロシア、ヨーロッパ、北米など、APSSM加盟国以外からの参加もあり、大変国際的な学会となり盛り上がりしました。招待者は百十三名で、ISSM Presidentはじめ世界的リーダー「Master Lecture」Plenary Lecture、Symposiumなど最新の知見をご発表いただき、学術的にレベルの高いものとなりました。また、今回14th APSSMを我が国で開催させていただいたことは、我が国の本学術分野の活動を国内外に示す絶好の機会となったかと存じます。

国際学会は、学術的内容のみならず、国際交流・親善を深める場を提供させていただくことも重要と考え、丁度開催中の「金沢百万石まつり」の最大イベントである「百万石行列」を皆様に特別席で見物していただきました。また、夜は百万石踊り流しにも金沢大学附属病院のナースに混じって飛び入り参加し、楽しい時間を過ごしていただきました。

ANA
Crown
Plaza
Hotelへ開



催したGala dinnerでは、山野之義市長に歓迎の挨拶と金沢市の歴史をお話いただきました。金沢の町、祭りを満喫していただきながら、国内外の著名な先生方との交流を深められたと存じます。

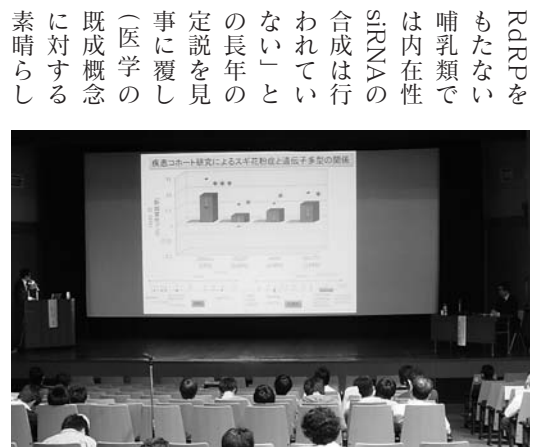
最後になりましたが、今回の国際学会にあたり多大なご援助を賜りました、金沢大学医学部泌尿器科学教室同窓会および全同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

14th APSSM組織委員長、
President of APSSM
並木 幹夫 記

平成二十五年度 十全医学会総会および 学術集会報告

去る六月二十八日(金)に金沢大学十全講堂において、平成二十五年度十全医学会総会ならびに十全医学会学術集会在開催されました。

総会では、庶務報告、会計報告、編集報告がなされた後、平成二十四年度(第九回)十全医学賞を受賞されました国立がん研究センター研究所がん幹細胞研究分野ユニット長の毎田佳子先生(受賞当時は、金沢大学医学系分子情報薬理学の助教であった)による記念講演会が行われ、十全医学会雑誌(百二十一巻四号)に掲載された総説「テロメア伸長酵素の新たな機能がヒトのRNAサイレンシングを司る」の研究内容が紹介されました。多くの会員が「これまで哺乳類ではRNA依存性RNAポリメラーゼ(RDRP)の存在が立証されていなかったため、



RDRPをもたない哺乳類では内在性siRNAの合成は行われていない」との長年の定説を見事に覆し(医学の既成概念に対する素晴らしい挑戦)、ヒトRDRPの存在(生物種を超えた普遍性を示した)を立証した素晴らしい研究発表に熱心に聞き入っている様子が大変印象的でした。

また、本年度の学術集会は、学術集會担当理事の和田隆志先生、村松正道先生および多久和陽先生の企画のもと、そのテーマを「コホート研究と先端医学の融合」といたしました。そして、世界の最先端で八面六臂の活躍をされている秦淳先生(九州大学大学院 環境医学分野 特任助教)、久保充明先生(理化学研究所 統合生命医科学研究センター 副センター長)、および油谷浩幸先生(東京大学 先端科学技術研究センター 教授)の三名の外部講師の先生方に加え、本学から中村裕之先生(環境生態医学・公衆衛生学)、鈴木健之先生(がん進展制御研究所 機能ゲノミクス研究分野)ならびに橋本真一先生(血液情報統御学)にも加わっていただき、コホート研究、疫学研究とゲノム医学の独創的かつ斬新

なアイデアや先進的な研究、また両者の接点とそのダイナミックな展開についても言及していただきました。

平日の午後であったにもかかわらず、総勢二百名近くの会員の皆様の出席を得て、活発に議論をしていただきました。誠に有難うございました。大変有意義で、実りのある学術集會であったと喜んでおります。十全医学会を代表しまして、会員の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、本学術集會の開催に向けて大変ご尽力いただきました和田先生、村松先生および多久和先生をはじめ、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

(太田 哲生 記)

医療薬学フォーラム2013/ 第二十一回クリニカル フォーラムシンポジウム

二〇一三年七月二十日(土)、二十一日(日)の両日、石川県立音楽堂とANAクラウンプラザホテル金沢を会場に、日本薬学会医療薬科学部会主催の「医療薬学フォーラム2013/第二十一回クリニカルフォーラムシンポジウム」を開催いたしました。『薬の専門家としての薬剤師の立ち位置を考える』をメインテーマとして、近年の病院におけるチーム医療や地域医療における薬剤師への期待にどのように応えるのか、そのための薬剤師教育はどうあるべきかを議論すべく企画しました。

特別講演として、アメリカ薬剤師会次

期会長のMatthew C. Osterhaus先生を招聘しました。先生は「Pharmacists, Now and in the Future」と題して、米国のヘルスケアシステムとファーマシューティカルケアの現状・課題と今後の展望について講演されました。

教育講演では、文部科学省高等教育局医学教育課課長の村田善則氏から「薬剤師教育をめぐる諸課題」と題して、薬学部の現状、薬学系人材養成の在り方に関する検討会での内容の概説、薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂および医学・歯学・看護教育の改善・充実について、幅広い内容の講演が行われました。

シンポジウムの初日は、「アメリカのClinical Pharmacistと日本の臨床薬剤師」、「TDMにおける薬剤師の立ち位置」とは、「薬剤師外来・医薬連携の実践・薬剤師から始める共同薬物治療管理」、「医療協働と医療薬学・薬剤師が果たすべき役割」、「医薬品をより安全で有効に使用するために…臨床試験における薬剤師の立ち位置」、「薬剤師業務の充実のための後方支援体制のあり方」、「今、薬剤師に求められているNSTでの活躍」など、薬剤師の果たすべき役割について現状分析を行い、二日目に「当事者が語る『医療薬学教育は、社会のニーズに応えられる様になったか?』」、「在宅医療における共同薬物治療管理の推進・薬業連携、医薬連携の現状と課題」、「チーム医療実践事業」にみる薬剤師の立ち位置」、「コア・カリ改訂・薬学教育改革と現場薬剤師の変革」、「開局薬剤師の将来像…これからの薬剤師の話をしよう」、「専門薬剤師としての立ち位置・専門性のさらなる飛躍に向けて」などをテーマ

に今からのあるべき薬剤師教育、薬剤師像を求めて活発な議論が展開されました。さらに前日のシンポジウムを受け、ワークショップ

「PN↓E N↓在宅までを考えてみよう!!!」を開催し、輸液から経腸(経口摂取)栄養さらには在宅を目標に体験的知識の共有がなされました。また、一般演題として三百二十一題のポスター発表もなされ、その内五題に優秀ポスター賞が授与されました。そして、約千七百名の参加者を得て、盛会裡に会を閉じることが出来ました。ここにご支援いただきました多くの方々に深謝いたします。

(実行委員長 宮本 謙一 記)



第六十八回 日本生理人類学会

日本生理人類学会が目指す方向および目的について、次のように記述されています。生理人類学は、現代に生きる私たち自身についての人類学であり、人間生活の質の向上に直接関わる科学です。これまで人類は、科学技術を発達させ、高度な文明を創り出し、地球の生物界では他に例を見ない繁栄を誇っています。今後この繁栄を維持するためには、人間の特性を真に解明し、科学技術をこれと矛盾しない方向へ発展させる必要があります。生理人類学は、「環境適応能」「テクノ・アダプタビリティ」「生理的多型性」「全身的協同」「機能的潜在性」をキーワードとして、ヒトの生理特性について、時間軸と空間軸の視点をもちながら解明することを目的としています。

本学会は、一九七八年に「生理人類学懇話会」として設立されました。一九八三年に懇話会は発展的に「生理人類学研究会」と改称、一九八七年より「生理人類学会」、一九九三年より「日本生理人類学会」として新たな歩みを始めています。人類学、生理学、人間工学、心理学、医学、看護学、健康科学、農学、家政学、環境科学、生活科学、体育学、機械工学、電子工学、建築学、木材科学、芸術学、デザイン科学などの幅広い分野から産官学の研究者が参加し、活発な学会活動を行っています。主要な主催行事は、学術大会(年に二回、六月と十一月ごろ開催)、セミナー、公開シンポジウムです。この他に、生理

人類士認定制度の実施、若手の会の開催、国際生理人類学連合学会の共催、専門書の発行も行っております。学会誌は、英文誌「Journal of Physiological Anthropology (JPA)」と和文誌「日本生理人類学会誌 - Japanese Journal of Physiological Anthropology」です。英文誌は、BMC (BioMed Central) のオープンアクセスジャーナルです。

本年六月には、第六十八回の当学会学術大会を金沢大学宝町キャンパスで開催しました。十全医学会からは、助成金をいただきました。御礼申し上げます。大会の詳細は「学会開催報告」にてご報告しましたが、公開特別講演、第八回人類学関連学会協議会・合同シンポジウム(テーマ: 人類の姿勢とロコモーション様式の特徴)、およびシンポジストを公募したシンポジウム(テーマ: 脳の活性化)を開催しました。お陰様で、充実した学術大会となりました。

また日本生理人類学会には、十三の研究部会(オフィス研究部会、快適性研究部会、感性研究部会、など)があります。私は、姿勢研究部会の部会長を務めており、これまで研究会を金沢大学医学部で四回開催してきました。参加者は、毎年三十〜四十名です。今年も、十二月に所沢で六回目の研究会を開催する予定です。研究会では、学術大会とは異なり、一つの演題に多くの時間を当て、その研究テーマについて十分に議論できるように心がけてきました。

(藤原 勝夫 記)

金沢大学 関連病院長会議

金沢大学関連病院長会議は平成二十五年七月六日(土)、例年通り金大病院の宝ホールで開催されました。北陸三県を主に関東・関西からも各金大関連病院長が集い、金大病院からは病院長(富田)はじめ、医学部長(山本健)、保健学系長(大竹)、各副病院長、全診療科の教授、医局長が出席し(計約百三十人余)意見交換と懇親を深めました。

まず本会議の役員交代(山田哲司会長、鶴浦雅志総務理事、勝木保夫会計理事)が紹介され、山田会長から「金大病院と関連病院の連携を一層深めたい」との挨拶があり、通常総会は速やかに進行しました。その後、意見交換会に移り、小生が金大病院長として挨拶させていただきました。その要旨は「関連病院からの医師要求の対応策として一番のポイントは研修医の確保であり、各医局長は涙ぐましいほど勧誘に奮励努力している。病院長四期目の今、八年前の就任当時を振り返ると、初期研修制度スタート時の入局者ゼロ、研修医二十〜三十人のどん底時代から這い上がって今年九十人前後にまで確保できるようになったのは、関連病院と一体になって研修医確保に向けて努力してきた賜物」と、経緯と感謝を述べ、いっそう協力態勢が必要であることをお願いしました。引き続き医薬保健研究域長(代理)として中村裕之先生が、医学類からは山本健先生が、保健学系からは大竹茂樹先生が各々の近況を紹

介し、金子副院長(研究担当)からは「金沢大学における研究体制と、金大病院の先端医療開発センターについて」、太田副病院長(地域連携担当)からは「金大病院CPDセンターの概要」を紹介していただきました。休憩時間・懇親会には実際にCPDセンターを見学体験していただき、病院長の方々も目を輝かせてコミュニケーション画面と格闘していただきました。

今回の新しい動きは何といっても昨年の決議に一方的に要望するばかりでなく、我々関連病院として大学病院に何ができるか、をもっと考えよう」を基に、新役員のもとで「大学病院側の医師確保対策に對し具体的に些少なながらも経済的な支援を始めよう!」という第一歩が踏み出されたことでした。誠にありがたく心強い限りです。

(富田 勝郎 記)

御遺骨返還式・ 合同慰霊祭

平成二十五年年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月十五日(土)午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まりました。西尾 茂総務課長による開式の辞に引き続き、平成二十四年度の献体者のご芳名が拝誦され、山本 健医学部長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆様述べられました。献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長 井

沢 義武様、理事長 竹山 雅万様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、山本 健医学部長、医学系研究科・医学類と附属病院の教職員、医員、学生が出席して始めました。名誉会員二十八名のご冥福を祈って黙祷をささげた後、祭主の山本 健医学部長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをごめて献花をし、山本 健医学部長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して山崎 孝明君(三年生代表)が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学分野教授 尾崎 紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、山本 健医学部長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治二十年の第四高等中学校医学部から現在に至るまでの、約六千名の献体者の芳名墓碑が三十四あり、井沢 義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第百十一回合同慰霊祭は午後二時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百八十六名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、山本 健医学部長、太田 哲生附属病院副病院長、医学系研究科・医学類・附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、山本

健医学部長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に太田哲生副病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となりました。

七月十日(水)、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。山本 健医学部長をはじめとする医学類の教職員多数の方々が参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン(金沢医学所教師)愛児(明治九年〜十年歿)の墓碑にもお参りしました。

(尾崎 紀之 記)



「北陸がんプロ」

北陸がんプロ統括コーディネーター 並木 幹夫

癌が国民の死亡原因の第一位になってから久しく、今や国民の二〜三人に一人が癌に罹患する時代になりました。しかし、「がん難民」という言葉に代表されるように、満足できるがん医療を受けられず、さまざま方が少なくありません。その原因は①がん医療の専門家（プロフェッショナル）の不足、②設備の整った医療施設の不足、③正しいがん医療情報の不足などが挙げられます。

この様な背景から、平成十九年四月に「がん対策基本法」が施行され、がん医療の均てん化が目標として掲げられました。時を同じくして、文部科学省はがん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがんに携わるコメディカル（※現在はコメディカルという名称は使用せず、医療従事者としている）等、がんに特化した医療人の養成を行うための優れた取り組みに対する補助事業を平成十九年から開始しました。

これが「がんプロフェッショナル養成プログラム」（一次がんプロ）です。北陸地区では金沢大学を中心に、他の四つの医科系、看護系大学（富山大学、金沢医科大学、福井大学、石川県立看護大学）が共同申請し採択されました。また、北陸三県の全ての「がん診療連携拠点病院」に協力施設になっていただき、プログラムを実施してきました。

本プログラムの特色は、高い臨床能力と研究能力を併せ持つがん専門医師及びコメディカル養成のための融合型教育システムの構築にあります。また、教育ツ

ルとして積極的ICT(Information & communication technology)を利用しており、e-learningによる自由度の高い履修システムを採用しました。平成十九年度から二十三年度の五年間の成果は以下の通りになります。

一、E-learningによるがんプロ講義の受講

大学院生の受講申し込みは全専攻から毎年六十名以上あり、多くの大学院生が最新のがん医療を学んでいます。また、大学院の専攻によらず単位取得（最大十二単位まで取得可能）にも利用されています。

二、キャンサーボードへの参加

北陸がんプロの最も誇れる企画が二週毎にテレビ会議システムを利用して行われているキャンサーボードで、診療科、職種を越えた融合型教育の実践の場として全国的に高く評価されています。診療連携拠点病院も含め毎回五十十か所の施設を結び、五十〜百名程度の医療従事者により行われる討議は既に百回を超え、毎回充実した内容になっています。また、同様な試みとして、毎月一回テレビ会議システムを使用して看護師による事例検討会も行われています。

三、各種資格認定

多くの受講生が、がんプロ認定医、エキスパート認定医、エキスパート看護師などの資格を取得していますが、同時に各種学会の専門医・認定医を取得するがんプロ受講生が増加しています。その中には取得が容易でないがん薬物療法専門医も含まれており、がんプロの学習効果が示されています。また、やはり取得が難しいがん

看護専門看護師が北陸がんプロ受講生から続々誕生しており、北陸地区のがん医療が着実に向上していると推測されます。

四、一般市民への広報活動

北陸がんプロでは、一般市民の皆様にご覧にのり、北陸がんプロ受講生から続々誕生しており、北陸地区のがん医療が着実に向上していると推測されます。

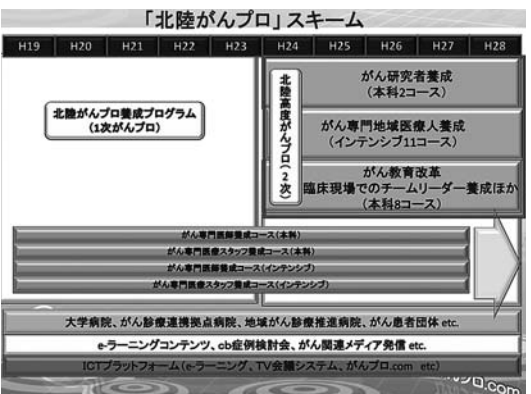
一般市民向けの市民公開講座も北陸三県で毎年約二十回行われ、すっかり北陸の住民の間で有名になり、毎回多くの聴衆を集めています。金沢大学医学類主催の医学展とも共催し、学類学生とも協力してがんの啓発活動を行っています。さらに、ケーブルテレビでもがんプロが協力する番組を持つなど、様々なメディアを通じてがんプロの活動を行っています。

当初のがんプロフェッショナル養成プログラムへの文部科学省からの予算措置は平成二十三年度で終了しましたが、平成二十四年度から

新たながんプロ、「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」（二次がんプロ）が新たに始まり、北陸地区も前回同様の連携で申請し、前述した取り組みが評価され再度採択されました。

今回は二次がんプロ事業を継続しつつ、新たな三つの取り組みが求められています（図）。一つ目は「がん教育改革によるがん専門医療人養成」で、従来とは異なる教育手法の導入により、がんに関する国際的視野を持った指導者や臨床現場でのリーダーをはじめとした優れたがん専門医療人の養成を目的としています。二つ目は「地域がん医療に貢献するがん専門医療人養成」で、地域医療機関との連携等により地域のがん医療の質向上や医師等の確保など、地域がん医療に貢献する優れたがん専門医療人の養成を目的としています。三つ目は「がん研究者養成」で、将来がんに関する新たな診断・治療法や看護法、医薬品・医療機器の開発研究等を担う高度な研究能力を有するがん研究者の養成を目的としています。

既に二次がんプロがスタートし、一年以上経過しましたが、がんに特化した研究分野である「国際がん治療学分野」を立ち上げるなど、目標に向かって努力をしています。がんプロ事業は北陸地区のがん医療の向上のみならず、北陸の五大学が共通カリキュラムで教育を行うなど、将来の教育改革も視野に入れており、金沢大学のリーダーシップが問われる事業かと思えます。十全同窓会会員各位をはじめ、関係の皆様のご支援・ご指導を何卒宜しくお願い申し上げます。



病院紹介

石川県立中央病院

現状と将来構想

本院は昭和二十三年十一月に県立病院として発足し、昭和五十一年六月に現在地に移転、今日に至っています。数度の増・改築を経て、現在の許可病床数は、一般病床六百六十二床となっています。平成二十五年四月の時点で、医師数百五十名、総職員数千三十四人（委託職員は除く）であり、診療科は院内標榜科を含め三十六科を数えます。

昭和五十一年現在地に移転以来既に三十七年経過し、老朽化が進み、増築による対応も限界となり、平成二十三年「新県立中央病院整備検討委員会」の意見を踏まえ、現在地で新病院を建築することが決まりました。既に基本構想の策定が終了し、現在実施設計が行われています。新病院は免震構造が採られ、有事の際にも基幹災害拠点病院として、安全で安心な病院として力を発揮することができるようになります。来年度から建築が開始され、四年後の平成二十九年に新病院が完成する予定です。

石川県立中央病院の目指す医療

本院が目指す医療は、病院の基本方針である、①患者さん本位の医療の推進に努めます ②地域医療の確保に努めます ③医療水準の向上に努めます ④安全管理の徹底に努めます ⑤健全経営の確保に努めます の五つに集約できます。

具体的には、県内全域を医療圏とする石川県の基幹病院として、一般の医療機関では対応困難な高度医療や政策医療を、とりわけ急性期医療を行うことが本院の使命といえます。急性期から回復期を経て自宅に戻るまで、患者さんが切れ目ない医療を効率良く受けることができ医療連携体制の整備・構築を目的とした第六次石川県医療計画が、本年四月からスタートしました。その中で、国の重点医療事業でもある四疾病（がん医療、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病）・五事業（救急医療、災害医療、へき地医療、周産期医療、小児医療）において、当院は急性期医療を担うことが決められています。二十四時間三百六十五日急性期医療を提供できる病院として、地域の医療機関や福祉施設等と一層の連携を推進し、地域医療に貢献することが、当院の使命であり目標でもあります。

そのため、現在以下のような診療を積極的にを行っています。

救急医療の分野では、救命救急センターとして、救急専門医を二十四時間配置し、一日平均八・五台の救急車を受け入れ、さらに年間二万人以上の時間外救急患者の診療を行っています。

小児・周産期医療分野では、県内唯一の総合周産期母子医療センターとして、新生児集中治療室と母体胎児集中治療室に、年間二百人以上の未熟児・新生児や、母体搬送患者を受け入れています。また一日二十三人以上の時間外小児救急患者の診療も合わせて行っています。

がん医療分野では、石川県のがん診療連携拠点病院の一つとして、体への侵襲の少ない治療法を積極的に導入しています。

脳卒中、急性心筋梗塞や大腿骨骨折医療分野では、地域連携パスによる病病連携を行うことで、急性期から回復期にかけての切れ目ない医療を効率的に行っています。

内視鏡手術、腹腔鏡手術といった最新治療を標準治療法として行い、入院期間の短縮と治療法の標準化・均てん化を目標としたクリニカルパスを採用し、術後は早期に「かかりつけ医」への逆紹介を行い、病診連携に努めています。本年は、さらに安全で高度な手術を行うための手術用ロボット（ダヴィンチ）を購入する予定です。

以上が石川県立中央病院の簡単な現状と将来構想ですが、今後も金沢大学医学部の関連施設として、大学に協力しながら県民に安全、安心で質の高い医療を提供していくようと考えております。

（院長 山田 哲司 記）

エイズ治療では、北陸ブロック拠点病院として、北陸三県のHIV患者の診療はもとより、HIV予防の啓発活動を北陸三県で行っています。

臨床研修指定病院として 当院は臨床研修指定病院として、毎年管理型研修医（単独型研修医）を十人程度と金沢大学とのたすきがけ研修医（協力型研修医）を数名採用しています。研修プログラムは、研修医と指導医の相談の上決定しており、できるだけ研修医の希望に沿った研修が行えるように配慮しています。二年間の研修終了後は、当



病院紹介

日本赤十字社富山赤十字病院

富山赤十字病院概要

当院は、明治四十年日本赤十字社富山支部病院として富山市の中心部の総曲輪において診療したのが病院の始まりで、平成八年に現在の地に新築移転し、平成十九年には開院百周年を迎えており、富山県で最も伝統ある病院です。現在の一般病床数四百三十五床(うちICU四床、CCU四床)、二十一の診療科、職員数は七百一名で、地域医療支援病院、災害拠点病院、富山県がん診療地域連携拠点病院、厚生労働省臨床研修指定病院、二次救急指定病院など多くの資格を有しております。

富山赤十字病院の基本方針

当院では、人道・博愛の赤十字精神にもとづく良質で安全な医療の提供を基本理念として、その実現のために、患者さん中心の医療を提供します。二、より高度な医療の実践を目指します。三、地域医療に貢献する病院を目指します。四、災害救護ならびに医療社会奉仕に努めます。五、次代を担う医療従事者を育成します。六、働きがいのある病院運営に努めます。七、健全経営の維持に努めます。の七つの基本方針を掲げ、富山県における救急医療および高度医療を提供する急性期病院を目指しています。また、最も重要なことは安心・安全な医療を提供することと考えており今年度より5S活動(整理、整頓、清掃、清潔、躰)を

推進し、安全・効率・品質の向上に努めております。

富山赤十字病院の目指す医療

①救急・高度医療の提供

当院は二次救急輪番病院で年間救急車搬送件数は約三千四百で年々増加しております。高度医療としては主として心臓管疾患と癌に力を入れております。心臓カテーテル治療(PCI)、ACバイパス手術は県下有数のレベルです。増え続ける癌の医療に携わっているのは、腫瘍内科(消化器・肝臓・呼吸器・血液内科)と腹部・呼吸器・乳腺外科です。腫瘍内科では十五床の化学療法センターを中心に多職種で安全で適切な治療を行っております。消化器内科は、狭帯域光観察および拡大観察を組み合わせた質の高い内視鏡診断を提供し、内視鏡治療(EMR、ESD)、ラジオ波焼灼治療などに特に力を注いでおります。血液内科では難易度の高い同種移植にも積極的に取り組んでいます。腹部・呼吸器外科は、腹腔・胸腔鏡下手術を積極的に取り入れていきます。緩和ケアは、在宅ホスピスを中心に緩和ケア外来と連携して行っています。

②チーム医療の推進

県下で一番多い専門看護師二名、認定看護師十五名が配置され、質の高い専門的な看護の提供のため看護専門外来(手術サポート外来、がん看護外来、スキンケア外来、在宅療養支援外来、糖尿病療養支援外来、フットケア外来、助産外来、母乳外来など)を立ち上げチーム医療の推進に繋がっています。またリウマチセンター、化学療法センターでは多職種で診療にあたっております。

③地域連携の推進

地域は一つの病院・医療は地域ぐるみの観点から、地域医療連携室を機能させ顔の見知った関係づくり、病診連携を推進し、地域連携の会、開放病床、地域連携バス(糖尿病・大腿頸部骨折・脳卒中・心筋梗塞)などを用いて診療所の先生との連携を深めております。さらに訪問看護ステーションと在宅医の先生と連携を深め在宅医療の支援をさせていただいております。

④災害救護

三・一一東日本大震災では、県内ではいち早くDMATチームを派遣し、平成二十三年には災害拠点病院の指定を受けております。赤十字病院の使命として災害救護の拠点となる病院であることは多言を要しません。

⑤働きやすい職場

互助会活動(全国日赤スポーツ大会、富山まつり越中おわら踊りの参加、旅行、新年会など)の充実をはかり、職員間の連帯感・コミュニケーションを深めています。本年四月より院内保育所を開設し、女性に働きやすい職場環境を整えています。医師業務負担軽減のために、医師事務作業補助者を積極的に配置しています。教育面では、臨床研修指定病院として研修医を積極的に受け入れ、専門・認定看護師の教育・育成にも力を注いでいます。

⑤健全経営

独立採算での病院運営は健全経営でなければなりません。幸い一昨年より黒字化を維持できております。病院経営は事務部の力との言葉がありますが、本年より事務員を本社研修に派遣し高度な経営戦略を持つ管理者の育成を図っております。

以上、病院の概要を紹介させていただきましたが、今後とも皆様のご支援をお願いいたします。

(院長 平岩 善雄 記)



教室だより

皮膚科学

皮膚科学教室は、その開設以前に、古くから教育科目としての皮膚科学を見いだすことができました。金沢医科大学の校則には、教育科目として「皮膚病及梅毒論」が挙げられており、明治三十四年に開設された金沢医学専門学校では、学科課程表に外科学の一部門として「皮膚病花柳病学」が明記されています。

時代が移り、大正元年十二月五日に土肥章司教授が金沢医学専門学校教授として着任し、同二年二月二十日に皮膚病花柳病学教室が開設されました。大正十二年四月、金沢医科大学昇格時に、教室の名称は皮膚科性病科学講座となり、昭和五年九月には皮膚科泌尿器科学講座に改称され、昭和三十年九月に泌尿器科講座が分離されると同時に、皮膚科学教室と改められました。そして平成十三年の大学院重点化に伴い、金沢大学大学院医学系研究科循環器医学専攻血管新生・結合組織代謝学に名称変更され、さらに大学院組織の改組により平成二十四年四月からは医療保健研究域医学系皮膚科学となっております。

現（八代）教授の竹原和彦は、平成六年就任当時から国内だけでなく海外へも積極的に教室員を派遣し、優秀な研究者の育成、診療・検査技術の向上を目指してきました。その成果が実り、約三十名だった教室員は六十名近くに増え、数多くの研究成果が世界へ発信されている他、教室員の増加は地域医療支援としての力も発揮

し、北陸三県・東京都・京都府の四十六の関連病院に医師を派遣するまでに教室が拡充しました。そして現在、種々の難治性皮膚疾患の診断や治療を行う北陸の中核医療施設としての役割を果たしつつ、高い専門性を持つ強皮症およびその他の膠原病、アトピー性皮膚炎を代表とする皮膚アレルギー疾患、悪性黒色腫などの皮膚悪性腫瘍、サイトカイン病と考えられる乾癬などの幅広い疾患の診療を行う全国の中心の診療教育施設となっております。

当教室では、「Challenging for Global NO.1」をキャッチフレーズに、臨床も一流、研究も一流を目指しています。そして臨床でも、研究でも、レジャーでも、チームワークを重視し、「人と人との触れ合い」でお互いを鍛え、支え合うのが当教室のスタンスです。

我々の皮膚科は決して「楽な皮膚科」ではありません。若い力のモチベーションを大切に、そのモチベーションを高めつつ「鍛えられる皮膚科」です。

一、強皮症の病態解明に向けてー竹原の二段階線維化仮説ー

竹原は教授就任間もなく、強皮症の線維化の原因究明・治療法の開発を目的に線維化モデルマウスの作成を試み、「CTGF」と「TGF β 」の組み合わせ投与により不可逆的な線維化が誘導されることを発見し、線維化は「TGF- β 」が誘導し「CTGF」が維持するという強皮症二段階線維化仮説を世界に先駆けて提唱しました。この動物モデルを用いて、サイトカインや接着因子などの強皮症の病態への関与に関する研究や、抗「CTGF」抗体をはじめとする新規治療の開発の他、強皮症研究会議の創設や、世界の強皮症研究者を招いた国際

ワークショップを主宰するなど、日本の強皮症研究をリードし続けています。

二、自己免疫機序の解明に向けてーB細胞が病態の主役かー

近年、B細胞は抗体産生以外に多彩な機能を持つことがわかってきました。当教室でもB細胞免疫学に基づき、膠原病の自己免疫機序の解明・新規治療の開発に関する研究を展開させています。これまでに、全身性強皮症のB細胞におけるシグナル制御分子の発現上昇やホメオスタシス異常、B細胞を標的とした抗体治療により強皮症モデルマウスの皮膚硬化や自己抗体産生が抑制されることなどを明らかにしてきました。最近では、抗「DnD」抗体によるB細胞除去療法分子学的効果を明らかにして報告しています。更に、B細胞の中には炎症や自己免疫を抑制する抑制性B細胞が存在することや、その作用機序に関する研究結果を報告し、世界中の注目を集めています。

三、免疫沈降法による新規自己抗体の発見

膠原病において自己抗体が明らかになることは、各症例の診断、治療の選択、予後の推定に非常に有用です。しかし、実際には通常の検査では検出できない抗体が数多く存在します。当教室では、これら測定困難な自己抗体を免疫沈降法で測定しており、全国から無

料で依頼を受けています。

最近我々は悪性腫瘍を合併する皮膚筋炎に検出される新規の自己抗体（抗「 α 2(I)抗体」）を発見し、世界的に大きな反響を受けています。このような臨床研究は日常診療に直結し、大変重要な意味を持つものと考えます。

最後に、当教室は大正元年の開設から本年平成二十五年で百周年を迎えました。そして五月十九日に、百周年を記念した、金沢大学皮膚科学教室創立百周年記念学術講演会、式典および祝賀会を開催致しました。前日には同門の先生方や縁の深い先生方にお集まりいただき、温泉旅館での前夜祭も執り行いました。両日とも大変に盛況で、特に祝賀会では、医師・看護師の他、関連病院やコメディカルスタッフなど総勢四百名以上の方々にご出席を賜り、当教室はかくも多くの方々に支えられているものであると改めて実感致しました。

当教室が百年に渡り歩んで来られたのも、ひとえに同窓会や関連病院の先生方のご支援の賜物であり、深く感謝致しております。そして今後とも世界の金沢大学の一端を担うべく、診療・研究・教育に尽力して参りますので、益々のご指導・ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

（斎藤 佑希 記）



教室だより

分子細胞病理学

研究分野の沿革

平成十七年に大井章史が教授に就任し、現在の教室がスタートした。新教室立ち上げに際し、一瀬久美子助教、池田博子テニユア助教、北川諭助教の協力を得たが、それぞれピッツバーグ大学シニア研究員、金沢大学病院病理部副部長、トヨタ記念病院病理部長として活躍中である。また、大井と山梨医大から行動をとるとしてきた鈴木潮人助教は、平成十九年ウブサラ大学からの留学から帰国後合流し、平成二十三年准教授に昇進し、教室の発展に尽くし平成二十四年、郷里の磐田市民病院病理部長に赴任した。

現在、消化器内科医として九年間臨床に携わった後、平成二十一年に教室に参加した田尻亮輔助教、浜松医科大学医学部医学科を卒業後、同大学院医学系研究科を修了し、Emory University, Lerner Research Institute, University of Aberdeenの三研究機関でポスドクを経験し、平成二十四年四月から助教をしている中村律子助教、東京大学工学部卒業後、医学研究にめざめ岐阜大学医学部卒、同大学院で学び平成二十四年四月に教室に加わった尾山武助教といった、さまざまなバックグラウンドを持った三人がともに教育、研究、診断に切磋琢磨している。大井は平成二十一年からは、形態機能病理学講座の中沼安二教授と交代で大学病院病理部長を兼任し

ており、基礎講座（この分類はナンセンスと思うが）では唯一（形態機能病理学講座とともに）、スタッフ全員が大学院の通常業務の一翼を担っている。

また、時間外、休日、深夜の病理解剖の介助を厭わず、鉄人のごとく数百枚の標本作製をこなす技術専門職員、水上隆技師がおり、旧第一病理学講座以来の生え抜きベテラン、チャレンジ精神旺盛な技術専門職員徳田良子技師、鮎岡早苗技師の三人が、教室業務の大きな推進役となっている。

研究の紹介（尾山 武）

腫瘍内不均一性とエピジェネティクス

腫瘍内不均一性は一つの固形腫瘍の内部で様々な形質もつ細胞集団が存在するもので、具体的には一つの腫瘍組織内で、互いに異なる遺伝子の変異、タンパク発現、病理組織型を示す細胞集団が観察されるものです。腫瘍内不均一性を引き起こす原因として、その多くは遺伝的不安定性などによる遺伝子変異の関与が示唆されていますが、遺伝子変異によらないエピジェネティックな変化が関与する可能性も考えられます。

エピジェネティクスが腫瘍内不均一性に関与していることを支持するものの一つとして、「癌幹細胞仮説」があげられます。幹細胞は複数系統の細胞に分化できる能力を有する細胞ですが、がん細胞にこの幹細胞仮説を当てはめたものが、癌幹細胞仮説です。本仮説によれば、癌細胞集団の内部では、同一な遺伝子型を有する癌細胞が、癌幹細胞を頂点として様々な表現形質を有する細胞からなる集団を形成しているというもので、これによって一つの腫瘍組織の内部に相異なる

癌細胞集団が形成されるというものです。現在、腫瘍内不均一性を示す消化器癌において、その互いに異なる細胞集団に対してDNAメチル化等を比較することにより、エピジェネティックな変化の関わりを検索しています。

研究の紹介（中村律子）

腎癌発生におけるNei2遺伝子の意義

Cleveland/Aberdeenでは網膜視蓋投射などの神経軸索伸長に関わる分子に関する研究をしていました。特に着目していた分子がNei1 (Neural epidermal growth factor like-like) という分泌型タンパク質です。発生期のニワトリにおいて、網膜からの神経が中脳視蓋へ投射する際、視蓋の表層から神経が内部へ侵入しますが、一定の層までしか神経は侵入することができません。その層にNei2が発現しており、神経軸索伸長のバリア的な役割をしています。Nei2が発生の期のマウスの腎臓で発現していることを偶然発見し、腎癌やその他の泌尿器系癌においてもNei2が癌の発生や転移、浸潤などに関わっているのではないかと推測しました。Nei2が発生期に発現していたことから、正常部と比較し癌でより高発現をしているのではないかと考えましたが、予想に反し、腎癌細胞株ではNei1, Nei2ともにRNAの発現は低く、DNAのCPG領域にメチル化が生じている細胞株もあり、それが低発現の一因となっていると考えています。

研究の紹介（田尻亮輔）

ヒト癌における受容体チロシンキナーゼ遺伝子増幅の多様性

胃癌、大腸癌、乳癌においてHER2, EGFR, FGFR2, METなどの受容体チロ

シンキナーゼをコードする遺伝子の増幅が見つかり、これらの受容体チロシンキナーゼを標的とする標的治療法が、次々と臨床応用されつつある。しかし、実際に効果の現れる症例はそれほど多くは無く、対象となる腫瘍の遺伝子異常をもっと詳細に検索する必要性を感じた。そこで、我々は、multiple ligation dependent probe amplification (MLPA) をもちいて、各種遺伝子のコピー数を網羅的に検索し、異常のある遺伝子についてFISHで詳細に検討している。MLPAでは50-100bpのヌクレオチドを検出するため、パラフィン切片から抽出したDNAでも充分解析できる上、三十種余りの遺伝子のコピー数異常を同時に検出することが可能である。この過程で、複数の受容体チロシンキナーゼを標的とする標的治療法が必要であることを報告している。

（大井 章史 記）



支部だより

沖縄支部

去る平成二十五年二月二十三日(土)に十全同窓会沖縄支部総会が、那覇市のホテル日航那覇グランドキャッスルで開催されました。参加者は昨年よりさらに増えて総勢二十五名を数えました。今年度は、宮古島で南静園の園長を務めている新城日出郎先生(昭和五十六年卒業)が十数年ぶりに出席してくださいました。沖縄支部の最長老である山城則亮先生と金城国昭先生(共に昭和三十一年卒業)も元気なお顔を見せていただきました。それに次ぐ大先輩である国吉 勲先生(昭和三十七年卒業)にもご参加いただきました。お三方とも現役でご活躍中です。



た。今年度は本学から心肺・総合外科の渡邊剛教授をお招きして記念講演を賜ることになっていました。しかし、まさに会が始まる直前に、渡邊教授に緊急連絡が入り、緊急心臓手術のため、今晚中に福岡へ発たないといけない状況となりました。急遽プログラムを変更してとにか

高寮歌を全員で放吟し、中締めとなりました。

出席者記念写真(敬称略)

(上原 元 記)

く渡邊教授のご講演から始めることにしました。心拍動下のバイパス手術を日本で最初に始められて第一人者となるまでのお話や、患者に与える侵襲を最小限にして、手術の翌日から歩けるようになるロボットを用いた心臓手術手技を次々と開拓しているお話などをうかがいました。心臓手術で死亡例がほとんどないことも驚きでした。ほんとに日本最先端の心臓手術をしかも安全に我が母校で行っていることをお聞きして身震いするほどの感動を覚えました。もっと詳しくお話をお聞きしたかったのですが、残念ながら時間切れとなり、記念写真までは何とか渡邊教授にもお入りいただいて、あわただしく最終便で福岡へ出発されました。到着後、すぐに手術を始められ、無事成功したことを後でお聞きし、あらためて金沢のブラックジャックだと感じ入った次第です。渡邊教授をお見送りした後、教授と同級生である浜端宏英先生(昭和六十年卒業)が大事に保存していた学生時代に作成した渡邊教授と浜端先生も出演しているビデオ映画を鑑賞しました。若かりし頃のお二人を見ながら学生時代の思い出話に花が咲きました。その後、上原 元が昨年金大医学部創立百五十周年記念式典に出席した時のスライドを供覧し、盛り上がったところで名残惜しかったのですが、最後は恒例の四

- 前列左より、堀川恭偉(昭和五十六年卒業)、国吉 勲(昭和三十七年卒業)、山城則亮(昭和三十一年卒業)、渡邊 剛教授、金城国昭(昭和三十一年卒業)、長田信洋(昭和五十三年卒業)、上原 元(昭和五十年卒業)、浜端宏英(昭和六十年卒業)、中列左より、未田善彦(平成十七年卒業)、外間政利(昭和五十三年卒業)、大城康彦(昭和四十八年卒業)、安谷屋茂男(昭和四十六年卒業)、伊是名博之(昭和四十九年卒業)、大浦 孝(昭和四十六年卒業)、喜屋武 元(昭和四十六年卒業)、国吉光雄(昭和四十六年卒業)、安里 公(昭和四十八年卒業)、後列左より、伊波久光(昭和五十三年卒業)、知念 弘(昭和五十七年卒業)、楠 憲夫(昭和四十七年卒業)、崎山慧史(昭和五十三年卒業)、新城日出郎(昭和五十六年卒業)、豊見山義隆(昭和五十八年卒業)、屋良朝雄(昭和五十五年卒業)、知名 保(昭和四十七年卒業)

岐阜支部

本年五月十九日(日)に平成二十五年度十全同窓会岐阜支部総会が岐阜市長良川河畔の「都ホテル」で金沢大学長中村信一先生をお迎えして開催されました。

当日は快晴に恵まれたのは良かったものの、「高橋直子選手と一緒に走る清流ハーフマラソン」と重なり、長良川河畔、ホテル周辺は朝から交通規制が一带に有り車でホテルに着くのに予想外に時間が掛り遅刻者が続出し、中村先生はみえているのに開会が少し遅れ幹事としてはハラハラさせられました。中村先生が「金



沢大学医学部創立百五十周年」の歴史と、現状をスライドを使い、大変わかり易くお話し下さいました。百五十年前に加賀藩が種痘により天然痘の蔓延を防ぐために彦三種痘所を開設し、更に卯辰山養生所、金沢医学館、石川県甲種医学学校、第四高等学校医学部、官立金沢医科大学、国立金沢大学へと繋がる流れを改めて思い起こし、「創基一五〇年を迎えた金沢大学」が「先魁」「共存」「創造」をキーワードに発展を目指している現状を聞き、会員一同嘗ての自分を思い起こしたり、現在の医学部の様子を知る事が出来て感銘を受けたりで、出席者は大変喜んでいました。その後懇親会に移りましたが、現在、岐阜県支部会員は五十四名

います。十七名の出席があり、今回は若い先生の出席が多く身近に先輩、後輩の存在を知りお互いに絆を深め今後の診療での連携など、話が弾んで居る様でした。中村先生はお帰りの電車の都合で少し早めに退席されましたがその後も話に花が咲き予定の時間を過ぎて次回の再会を約して散会となりました。

出席者：中村信一学長、永井永二（昭和十九年卒業）、大島正雄（昭和二十四年卒業）、大西弘生（昭和五十一年卒業）、国枝克行（昭和五十三年卒業）、中島鉄夫（昭和五十三年卒業）、徳永周二（昭和五十四年卒業）、井奈波良一（昭和五十五年卒業）、渡辺幸夫（昭和五十六年卒業）、高橋健（昭和五十七年卒業）、横山和俊（昭和五十八年卒業）、竹村博文（昭和六十年卒業）、花立史香（昭和六十年卒業）、雪田洋介（平成十七年卒業）、坂下達哉（平成二十三年卒業）、位田優（平成二十三年卒業）、水野哲志（平成二十四年卒業）、米倉幸人（昭和三十九年卒業）
（米倉 幸人 記）

愛知支部

平成二十五年六月八日（土）午後四時三十分より例年と同様、名鉄グランドホテル北京宮廷料理「涵梅舫」にて、第二十七回金沢大学医学部十全同窓会の愛知県支部総会が開催されました。

まず尾張地区副支部長の吉尾豪先生（昭和四十五年卒業）より開会のことばをいただき、引き続きこの一年の間に逝去されました小篠築先生（昭和二十五年卒業）のご冥福をお祈りし、黙祷をささげました。

次に支部長の尾山淳先生（昭和四十三年卒業）よりご挨拶をいただいたのち、



幹事の篠田雅幸先生（昭和五十一年卒業）より会計報告、監査の横田徳久先生（昭和三十五年卒業）より監査報告があり、全員の承認を得ました。

さて、今回の協議事項について新幹事の紹介がありました。というのも昨年度まで当支部幹事であった高味良行先生（平成元年卒業）が関西医科大学の臨床教授として異動されることになったからです。ご活躍を期待しています。そしてその代わりにまず平成十一年卒業の金子佳史先生が昨年より金沢からこちらにお戻りになり、幹事に加わってくれることになりました。金沢について一番の情報通として活躍していただけたと思います。さらに卒業

後より何度も総会に参加して頂いている平成二十年卒業の工野玲美先生にもお願いしました。若い先生方の考え方も参考にしたと思います。

今回の近況報告は金沢大学医学図書館のリニューアルオープンについて金沢大学医学部十全同窓会会長の佐藤保先生（昭和三十五年卒業）よりお話ししていただきました。旧図書館の耐震性不足を補うため、二〇一〇年から旧図書館を増築する形で整備が進められ、本年三月に竣工式が行われたそうです。新図書館は鉄筋コンクリート四階建てで、飲食が出来るブックラウンジやパソコンコーナーがあるなど、数々の写真をもとにご紹介していただきました。

その後、熊本大学名誉教授、九州中央リハビリテーション学院長の児玉公道先生（昭和五十一年卒業）より「ヒトのからだに見る生命の歴史」という演題で講演がありました。脊椎動物の進化の歴史について魚類と両生類の形態の違い、次に両生類と爬虫類の違いへと順番に最後にヒトに至るまでの悠久の時間を一足飛びに語っていただきました。ホヤの幼生の標本などを各テーブルに回しながら、ときどき高山植物の写真が混じったスライドが進行し、とても楽しく知的好奇心が刺激される内容でした。また、お土産の熊本銘菓「誉れの陣太鼓」もご馳走様でした。

記念写真の撮影の後、懇親会が後藤玄夫先生（昭和二十四年卒業）の乾杯の音頭とともに始まりました。毎年徐々に若い方の参加が増え、活気が出てきたように思います。最後に今年最年少の宮澤宏幸先生（平成二十五年卒業）の音頭で全

員による万歳三唱が行われ、引き続き副支部長の伊藤健一先生（昭和五十一年卒業）より閉会のことばをいただき、それを持って散会となりました。

今回は三十七名の出席がありました。次回さらには大勢の先生方の参加を期待しています。

（篠田 雅幸 記）

滋賀支部

去る平成二十五年六月九日（日）、平成二十五年金沢大学医学部十全同窓会滋賀県支部総会が開催されました。例年より早い梅雨入り宣言に案じた天候も晴れ、会場の彦根キャッスルホテルからは新緑の緑に映える彦根城の天守が鮮やかでした。

同窓会本部より前放射線科教授の松井修先生にご来滋いただきました。支部同窓会員は十五名の参加でした。支部長浅野定弘先生の開会挨拶、朝日晋先生の会計報告後、松井先生より新しくなった金沢大学の角間と宝町のキャンパスの様子、創立一五〇周年の記念モニュメント像等の写真を見せていただいた後、先生の長年の素晴らしいお仕事の血管造影とそれに伴う肝臓の栓塞療法から大小の動脈瘤に対するステント療法までをご教授いただき大変感銘を受けました。

その後の懇親会は出席者最年少瀬戸山先生の乾杯の音頭で始まり、地元滋賀医大にて活躍の谷教授、浅井教授、三浦教授の三先生の出席もあり松井先生とも話が弾んだことと思われます。来年度は朝日先生の幹事のもとに再会を約して散会しました。

平成二十五年金沢大学十全同窓会 関東拡大支部合同総会開催される

想像もできないくらいに設備が充実しているのに、だれもが感心したことであらう。スタジオまで完

備している。すばらしいの一言しか出てこない。図書館は、もう本を借りる建物ではなくなった。多目的の、あらゆる知識を一度に入手し、加工し、そして発信するところとなった。

本年の講演は、山本博金沢大学医薬保健学総合研究科長にお願いした。山本先生は医学部創立百五十周年記念誌編集委員長として八面六臂の活躍をされたことは会員全員が周知のことであるが、今一度、その全容を四十分くらいにまとめて話してもらいたいという贅沢な要望をお願いしたのである。タイトルは、「金沢大学医学部の過去・現在・未来―伝えたい母校の歴史―」である。

記念誌を購入しても、隅から隅まで熟読する方は少ないだろう、どこの部分はこれまで知られていなかったことだ、などといったことは、やはり、直接、お話を聞きするしかない。金沢は日本のどこよりも先駆けて新しい医療の知識が入ってきていたところであったこと、はじめて知った次第。このような歴史を母体に金沢大学医学部が創立され、そして大きくたくましく育ってきたことを知り、参加した会員全員、金沢大学医学部を卒業したことを誇りに思い、胸を張ったことと思う。

島利夫神奈川支部長の乾杯の発声とともに、懇親会となった。支部長の挨拶とともに、大先輩の先生方、遠方からの先生、そして、昨年、本年卒業の若手の先生から、近況をお話してもらった。本年の参加者



写真

前列右より

安田美代子（昭和四十九年卒業）、朝日晋（昭和四十五年卒業）、宮浦靖郎（昭和三十六年卒業）、佐伯一善（昭和三十三年卒業）、松井先生、浅野定弘（昭和四十二年卒業）、白石制（昭和四十一年卒業）、江竜喜史（昭和三十九年卒業）、小野進（昭和四十七年卒業）、三浦克之（昭和六十三年卒業）

後列右より

浅井徹（昭和六十一年卒業）、桑原正喜（昭和四十九年卒業）、安田和弘（昭和四十八年卒業）、谷徹（昭和五十年卒業）、多賀俊明（昭和五十一年卒業）、瀬戸山博（平成元年卒業）

（白石 制 記）

十全同窓会の関東エリア（千葉、埼玉、神奈川、東京）の支部が一同に参集しておこなうことになって三回目、平成二十五年拡大支部合同総会が、八月三日に開催された。千葉支部長生水真紀夫先生、神奈川支部長島利夫先生、埼玉支部長瀬戸幹人先生のご協力、ご尽力の賜物であることを、冒頭に述べたい。

これまでながらく銀座のど真ん中にある銀座ライオンのクラシックホールで、それこそ「クラシック」に関東支部総会を開催していたのであるが、昨年の関東拡大合同総会には、いつもより多くの参加者（百名近い）があり、「こつたがえし」の状態になって、座る場所も、食べ物にもありつけない状態になってしまった。昨年を反省し、今回は場所をすこし広めにしようと本年五月末の幹事会で決定し、千葉、埼玉、神奈川からのアクセスも悪くないだろうと、元赤坂の東宮御所に近い「明治記念館」に場所を移した。

明治神宮外苑の一角にある明治記念館は、本館にあたる憲法記念館が明治二十一年に明治憲法草案審議の御前会議が行われた建物であり、また常緑の千坪の庭園が建物を囲んでいるので、通常、病院の中を患者さんのために奔走している支部会員には、すこしでも憩いの時間になるのではと、考えた次第である。

開会の挨拶後、十全同窓会佐藤保会長から近況報告をうかがった。新しい図書館設立について、詳しくうかがうことができた。大昔に在学していた者としては

は七十名であった。卒業年が二〇〇〇年以降の会員が九名で、参加者の一二％を占めた。金沢大学医学部卒で関東で研修している会員には、もつと参加していただきたいところである。アナウンスの周知がうまくいかないのか、住所変更されちゃうのか、はたまた多忙でそれどころではないということからか、なかなか参加人数が思うように増えない。昨年、本年卒業の会員は会費無料にしているの

で、来年は是非、参加してほしい。多くの先輩とお話しでき、関東におけるネットワークを構築でき、有益な情報を得ることが出来るのはまちがいないのである。

閉会間近には、昨年が続いて、埼玉支部長瀬戸先生のギター演奏とともに、四高寮歌を斉唱した。このギター演奏がなると、同窓会が縮まらない雰囲気になりつつある。

来年の再会を期して、夜八時に閉会となった。この日は神宮球場の花火大会の日で、会場から花火も堪能できたことを追記する。

なお、来年は八月九日（第二土曜日）、明治記念館で開催することとなった。

（内潟 安子 記）



クラス会

三九会同窓会

青葉の美しい季節、平成二十五年五月二十五日(土)、二十六日(日)の二日間、富山県の山田温泉玄猿楼にて、昭和三十一年卒業の同窓会を開催した。

全国から集まった友人と十人の夫人の総勢三十八名が、お互い元気に再開した事を喜び会い、午後六時に大広間で記念撮影の後、宴会を始めた。恒例により、一番遠くから参加した岡本宏君の乾杯の発声で始められた。余興には越中八尾おわら踊りを観賞し、続いて各人の近況を聞きながら盃を重ね、美酒が五臓六腑に滲みわたる頃、土屋良武君の音頭で第四高等学校時習寮南寮々歌「北の都に秋たけて」と第四高等学校南下軍の歌「ただに血を盛る瓶ならば」を声高らかに合唱し、中締めとした。その後、場所をカラオケラウンジに移動し、歳相応の古い歌を歌い、午後十一時に散会した。

この温泉は、約千二百年前、山田川の水辺で矢傷を負った老猿が傷を癒していた故事から「玄猿楼」と名付けられたと言われている。この浴槽に浸かり、ライトアップされた川向うの木々を眺め、五十年前の学生の頃の思い出を胸の中で反芻しながら、「幸せ」の時を過ごした。浴槽から出た後は、体が何時までも温かく、皮膚がしっとりとした感じになり、美男美女が益々美しくなった。

翌日、五月二十六日(日)はゴルフ組と観光組に分かれた。快晴のもとゴルフ組十五人は、呉羽カントリークラブ立



山コースを午前八時三十四分に第一組がスタートした。観光組二十人は富山市八尾町の和紙文庫と曳山会館展示室を見学し、割烹「綿宇(わたう)にて昼食をとった。来年は金沢で卒業五十周年記念同窓会をする事を約束して、別れを惜しんだ。

出席者(敬称略)

荒井邦夫夫妻、有川功夫夫妻、安積宏明夫妻、稲坂暢、井上雄元、岩佐嘉郎夫妻、江竜善史、岡本宏、加納勝利、河合義治、黒崎正夫、小林宣泰、小山素鷹、千鳥哲也、

土屋良武、中川正、中島良明夫妻、野垣俊幸夫妻、堀川利彦夫妻、馬淵宏、三島勉夫妻、宮城徹三郎夫妻、三輪晃一、矢吹朗彦、山田芳明、山本達、米倉幸人、渡辺国重夫妻 (岩佐 嘉郎 記)

四八会

(昭和四十八年卒業)

卒後四十年の同窓会を、金沢市内の料亭「金城楼」で平成二十五年六月二十九日に開催した。打ち水された玄関の横に、今を盛りに透けるように青いアジサイが待っていた。母校の現職教授の加藤・小泉・山本君が世話人となり、大学の横で開業している柳田君が受付を行い、共に学び遊んだ五十四名が参加した。遠くは沖繩から大城君が来た。入学当時は船と列車で数日かかったが、今では直行便の飛行機で数時間しかかからない。四十年間に金沢は駅も街も変わった。金沢大学は移転し県庁も移転し、第七ギョウザの店も移転した。スター劇場は消え去って跡形もない。唯一医学部が小立野にしがみついているのが僕らの青春の証だ。

三名の物語者に黙祷をささげた後、旧姓河崎さんの乾杯で開宴した。村田君の篠笛に全員が集中した。夕闇に静かに流れる笛の音はゆつくりと学生時代に連れ戻してくれた。今でも僕達はみんな仲間なのだ。一人一人が四十年間のドラマを語った。各々が体験した仕事や病気の数奇な話は延々と続いた。今でもゴルフを一日四ラウンドするとか、トライアスロンに参加しているとか、ヒマラヤ登山したとか、医者をやめて数学と宇宙の勉強を

しているとか。心筋梗塞や脳卒中から回復してきた友もいた。ここに来れたことを皆で喜んだ。楽しい歓談の時は瞬間に過ぎ、山本君の音頭で閉会し、次は五年後に富山で再会することを誓って宵闇に吸い込まれていった。片町には昔のように入若者が多かった。(前田 敏男 記)



同窓生の消息

金沢医科大学学長再任

勝田 省吾



この度、金沢医科大学学長に再任されました。これまでのいろいろなこととご指導・ご高配を賜りました十全同窓会の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。

私は、平成二十二年九月一日に学長を拝命し、これまでの三年間、金沢医科大学の教職員の皆さんと共に大学の発展に努めてまいりました。昨年、創立四十周年を迎えましたが十全同窓会の先生方にも祝福していただきました。改めて、お礼申し上げます。

今、大学を取り巻く環境は大変厳しいものがありますが、この厳しさに耐え得ることのできる大学づくりが最大の課題と思っております。最近、医学教育の質が国際的に問われる時代となり、我が国の医学教育は質の保証と国際基準の二つのキーワードのもと、臨床実習を益々重視する教育へと大きく変わろうとしています。これまでの医学教育の改革の中でも最も大きな変革の一つと言って過言ではありません。一方、医療の面では医師不足、医師の診療科偏在、地域偏在の課題を抱えております。医学・医療の将来を見据えて、医育機関としての役割を果

たさなければなりません。

本学は開学以来、「良医を育てる」、「知識と技術をきわめる」、「社会に貢献する」という建学の精神のもとに、「医の学」、「医の術」、「医の心」を備えた人間性豊かな良医の育成に力を注いできました。本学の医学部卒業生は三千六百八名に上り、医学・医療界で広く活躍しております。これからも建学の精神を伝え、社会的責任を果たすことのできる人材育成に全力を尽くしたいと考えております。

十全同窓会の先生方には、今後とも本学学生の学外臨床実習におけるご指導をはじめ、様々な面での温かいご支援を心からお願ひ申し上げます。

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒920-8640 金沢市宝町十三二
金沢大学医学部十全同窓会 会報係
TEL 076-2665-2132
FAX 076-2665-4200
juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

医師会コーナー

金沢大学医薬保健学域医学類 特別講義(一年生対象)

金沢大学医学類のご理解の下、県医師会が担当する新入生特別講義も六回目を迎える。今年のテーマは「医師として多様な生き方を考える」とした。一口に医師と言っても、その有り様は実に広く深い。

最先端で活躍する先輩達の語る言葉は、迫力と示唆に富み、学生達の真剣な表情が印象的だった。加えて、今年は「歌」「山」「放射線」という医療を超えた難題に挑戦する開業医の姿も紹介できた。自らの生き方の指針、その一助になればと願うばかりだ。最後に、県医師会若手によるミニ講演とダイアローグ。医療防衛という課題図書を設定したことも新たな試みである。医師会という組織が社会の中で果たしている役割を少しでも伝えることができたなら、望外の喜びである。

金沢大学医薬保健学域医学類 特別講義(一年生対象)

六月二十五日(火)

医師として、総論
石川県医師会会長 近藤 邦夫
芳珠記念病院小児科 多賀 千之
三大死因と戦う それぞれのエキスパート

七月二日(火)
①脳血管障害 ②心疾患 ③がん
金沢脳神経外科病院副院長 山本 信孝
金沢循環器病院長 寺井 英伸
石川県立中央病院消化器内科科長 土山 寿志

七月九日(火)
①歌
医師として多様な生き方を語る
石川県立中央病院消化器内科科長 土山 寿志

七月十六日(火)
①スキー冬山登山
②放射線の危険から
北山クリニック院長 北山 吉明
はやかわクリニック院長 早川 康浩
よしだ小児科クリニック院長 吉田 均

七月二十三日(火)
①小児科 ②産婦人科 ③救急
金沢医療センター 山宮 麻里
金沢メデイカルステーションヴィーク 結城 仰子
金沢医療センター 阪上 学

医師会ビジョン委員会と医師会を語ろう
課題図書「医療防衛―医師会はなぜ闘うのか―」
今村 聡・海堂 尊著

*八百字の読書感想文を事前に提出
①プレゼン「医師会って、なんだ!」
②グループディスカッション
③総括

石川県医師会理事 佐原 博之
石川県医師会理事 齊藤 典才
石川県医師会理事 菊地 勤
石川県医師会理事 洞庭 賢一
小松市医師会理事 村井 裕

新入生からのフィードバックを得て、今後より魅力的な特別講義を企画していく所存です。最後に多忙な時間を割きご協力いただいた講師の先生方にはこの場を借りて、お礼申し上げます。
(大平 政樹 記)

金沢医科大学医学部長就任

金沢医科大学医学部腎臓内科学 教授

横山 仁 (昭和五十五年卒業)



平成二十五年九月一日より金沢医科大学医学部長を拝命しました。これまで三年間医学部教

務部長を担当し、勝田省吾・学長、梅博久・前医学部長とともに医学教育モデル・コア・カリキュラム改正の要点である「卒業前臨床教育の充実」、「地域医療」、「研究マインドの涵養」に沿ったカリキュラムの充実を図ってまいりました。これは金沢医科大学の建学の精神に盛られている「人間性豊かな良医」を育成し、「社会に貢献」することに通ずるもので

す。今後、医学部長として、教官の教育・研究環境の充実を支援するとともに学生には優れた医学と医療技

術に接し、将来色々な分野において発展させる基礎を学ぶ機会をさらに拡大したいと考えています。また、EFMDにおける臨床実習七十二週義務化に端を発したわが国における医学教育の国際標準化評価（医学教育認証評価評議会による審査）が、平成二十六年年度から実施されようとしております。これに対応した取り組みが必要になって来ております。今後、十全同窓会の皆様には、地域における臨床実習等でこれまでも増してご協力をお願いすることが多くなるかと存じます。一層のご協力・ご鞭撻を今後とも賜りますようお願い申し上げます。

平成二十五年オープンキャンパス

医学類学生支援委員長 堀 修

平成二十五年年度の医学類オープンキャンパスは八月八日、九日の二日間にわたり、宝町キャンパスにて行われた。参加者数は年々増加傾向を示し、今年度は二日間

で五百三十四人に上った。高校一・二年生の参加者が中心であったが、高校三年生や高校卒業生、更には保護者の方も見受けられ、医学類に対する関心の高

さが窺われた。両日とも午前の部と午後の部に分かれ、計四回、ほぼ例年通りのプログラムで行われた。

内容としては、まず、金沢医科大学時代の教育・研究・診療風景をまとめたDVDの鑑賞に始まり、続いて山本健医学部長から、臨床医の業務、医学類学生に求められる資質、医師国家試験、医学類

入試制度等について説明がなされた。それに引き続き、堀修学生支援委員長から医学類の魅力、医学類での教育および学生生活（サークル活動、学生支援体制、医学展）について説明が行われた。参加者からは医学類のカリキュラムや大学生活の様子がわかってよかった、という声

が聞かれた。また、午前中行われた模擬講義では、八日は「脳の謎をひも解く」というタイトルで脳細胞遺伝子学の河崎洋志教授が、九日は「生物の進化と腎臓」というタイトルで血液情報統御学の和田隆志教授が行った。日常、無意識のうちに行われている視覚情報の統合及び制御、或いは人体の恒常性を維持するうえでなくてはならない腎臓の機能について、わかりやすい説明がなされ、高校生に大変好評であった。午後行われた教室紹介では、八日は「放射線医学教室」というタイトルで経血管診療学の蒲田敏文教授が、九日は「新規脳内物質の探索とその生理機能の探求」というタイトルで分子神経科学・統合生理学の櫻井武教授が行い、未知のことを明らかにしていく研究のおもしろさ、更に、その成果を臨床（医療）に応用していくことの重要性について説明がなされ、参加者は非常に真剣に聞き入っていた。

その後行われた教員・医学類学生との懇談会には、教育委員会メンバーの長瀬啓介教授、藤原勝夫教授、小泉順二教授の他、現役の医学類学生も加わり、学生募集委員の尾崎紀之教授の司会の下、参加者からの質問に答える形で進められた。特に医学類の学生生活や入試について、直接、医学類学生の意見を聞くこと

ができ、非常に有意義であった、という意見が聞かれた。

最後に、昨年から始まった記念館資料室見学では、参加者はキンストレーキや解体新書など、医学類の歴史を感じさせる展示物を実際に見学し、尾崎紀之教授から説明を受けた。高校生のみならず、保護者の方にも好評であった。

全体を通じて、例年にも増して盛況なオープンキャンパスであった。今後も、オープンキャンパスを通じて医学類の歴史、教育、研究、診療が特に若い世代に紹介され、ひいてはより良い学生の受け入れにつながればと思う次第である。



JUZEN FORUM HISTORICUM 十全歴史ひろば【一】

編集委員 山本 博

一、Juzen FORUM HISTORICUM 「十全歴史ひろば」連載の開始にあたって

金沢大学医学部（現医学類）は、文久二（一八六二）年創設の加賀藩彦三種痘所を淵源とする。昨平成二十四（二〇一二）年に、創立百五十周年を記念する事業の一つとして、「金沢大学医学部創立百五十周年記念誌」（以下、記念誌）が刊行された。

しかし、もし、金沢大学医学部十全同窓会会報に連載されてきた「医学部百五十年史のための覚え書（以下、覚え書）」と「十全人物伝」（以下、人物伝）が存在しなかったなら、記念誌は異なる運命を辿ったにちがいない。同じスケジュールで記念誌を上梓しようとしたなら、内容は恐ろしく貧弱になったであろう。また、同じ内容を達成しようとしたなら、記念誌の発行は大幅に遅れたことであろう。

覚え書は、幕末期から明治期にかけての北陸医史を中心とする医史学の泰斗である寺畑喜朝先生と赤祖父一知先生によって記された。連載は、会報第百十八号（平成十三年五月三十一日発行）に掲載された「覚え書【一】」を皮切りに、第百五十一号（平成二十四年五月二十二日発行）掲載の「覚え書【34】」まで計三十四回を数えた。内訳は寺畑先生によるもの二十四編、赤祖父先生によるもの十編である。

人物伝は、同じく医史学の泰斗で東洋医学にも明るい多留淳文先生、元会報編集委員長の山口成良先生と赤祖父先生によって記された。連載は、会報第百六号（平成九年五月十日発行）に掲載された「人物伝（一）」を皮切りに、第百三十五号（平成十九年一月十六日発行）掲載の「人物伝（21）」まで計二十一回を数えた。内訳は多留先生によるもの十七編、山口先生によるもの三編、赤祖父先生によるもの一編である。

寺畑先生は覚え書シリーズを開始するにあたり、つぎ

に遺すことになろう。従って筆者が係わってきた医史研究から、百五十年史編纂に役立つと考えた覚え書を今後「十全同窓会報」に余命の存続する限り書き残しておくと思う。」

Juzen FORUM HISTORICUM

十全歴史ひろばは、このような覚え書と人物伝の精神と役割を継承し、会報編集委員会が新たに設ける史料蒐集コーナーである。本学に

関係する歴史、本学ゆかりの人物とその仕事、未来に語り継がれるべき医学医療上あるいは関係する時代社会のできごとなどが書き貯められ、やがて書かれるべき百八十年史／百七十五年史、さらには二百年史、三百年史の編纂に資するところとなれば幸いである。

二、黒川自然翁像撰の読み下し

医学類教育棟の壁に埋め込まれている



原文
翁姓黒川名弼
字良安越中人
夙從蘭人修醫
術傍通諸科學
名聲曠世弘化
之初加賀藩擢
爲侍醫歷任種
痘所頭取醫學
館教授恩禮隆
渥秩祿屢加
藩泰西醫術之
盛者蓋翁之力
居多焉翁退職
二十餘年以老
龍明治二十三
年九月歿年七
十四後十九年
朝廷追贈正五
位褒之於是金
澤醫師會思翁
之功德榮 朝
之寵賜金錫鑄
之龍賜金錫鑄
像以垂不朽欲
使後進不忘其
所由

原文
翁姓黒川名弼
字良安越中人
夙從蘭人修醫
術傍通諸科學
名聲曠世弘化
之初加賀藩擢
爲侍醫歷任種
痘所頭取醫學
館教授恩禮隆
渥秩祿屢加
藩泰西醫術之
盛者蓋翁之力
居多焉翁退職
二十餘年以老
龍明治二十三
年九月歿年七
十四後十九年
朝廷追贈正五
位褒之於是金
澤醫師會思翁
之功德榮 朝
之寵賜金錫鑄
之龍賜金錫鑄
像以垂不朽欲
使後進不忘其
所由
明治四十四年三月
侯爵前田利爲題字
宮川熊三郎撰文

黒川良安銅像の基部に宮川熊三郎による撰文が鑄造されているが、その読み下し文は残されていない。石川県銭屋五兵衛記念館が本年九月十月に行う企画展「銭五一族と河北潟疑獄事件―加賀藩医 黒川良安の検証―」で黒川自然翁レリーフの写真が展示されることになり、この機会に漢文に造詣の深い加納重義金沢大学自然科学研究科長と中村正人人間社会学域法文学類に撰文の読み下しを依頼した。左に撰文の拡大写真、原文、読み下し文、訳注を示す。原文文末から五行目の「朝」（朝延の意）の前の空白は朝廷への表敬のための空白である。

読み下し文

翁ノ姓ハ黒川、名ハ弼、字ハ良安、越中ノ人。夙ニ蘭人從リ醫術ヲ修メ、傍ニ諸科學ニ通ジ、名聲ハ世ヲ曠ス。弘化之初、加賀藩ハ擢ヒテ侍醫ト爲ス。種痘所頭取、醫學館教授ヲ歴任シテ、恩禮、隆渥、秩祿ハ屢加ス。加藩泰西醫術之盛ナル者、蓋シ翁之力多キニ居ラン焉。翁ハ職ヲ退キ、二十餘年ニシテ老ヲ以テ罷ル。明治二十三年九月、歿年七十四。後十九年、朝廷ハ正五位ヲ追贈シテ之ヲ褒ム。是ニ於イテ、金澤醫師會ハ翁之功徳ヲ思ヒ、朝之龍賜金ヲ榮トシテ像ヲ錫鑄シ、以テ不朽ニ垂ンナントシ、後進ヲシテ其ノ所由ヲ忘レ不ラ使メント欲ス。
明治四十四年三月
侯爵前田利爲題字
宮川熊三郎撰文

*訳註（加納教授による）

- 翁（肖像の）老人（即ち 黒川良安）
- 夙ニ 早くから
- 蘭人 オランダ人
- 弘化 西暦一八四〇
- 頭取 指揮を執る人
- 恩禮 臣下を手厚く礼遇すること
- 隆渥 君恩のあつこと
- 秩祿 官位等による俸祿、家禄と賞典
- 屢加 次々と増加すること
- 加藩泰西醫術 加賀藩の西洋医学
- 馬 訓練しない助手
- 功徳 功績と徳行
- 朝（明治の）朝廷、政府
- 龍賜金 御下賜金
- 錫鑄 スズ鑄造
- 後進 物事に続く者（医師）
- 所由 物事のよつてきたところ、由縁
- 宮川熊三郎 一九〇一年時点で第四高等学校漢文教授
- 撰文 碑文を作ること

アツオトメーターの鬼つ子

佐藤 保 (昭和三十五年卒業)

世界一となったオトコの平均寿命にわが齢が近づくにつれ、新しい事象に殆ど興味がわいてこなくなり、我ながら困ったことだと嘆いている。趣味の本屋巡りをしている、たまに読みたいと思う本に出会い、心にときめきを覚えつつ買って帰ると、我が家の本棚に同じ本が鎮座ましますことが再三におよび、ボケもだいぶ進んだ証拠と近頃はあきらめてい

る。そんな当方の事情を見透かしたように、「十全昔話」に執筆するよう依頼が舞い込んできた。なるほど、新しい事象や出来事の記述・解説は無理でも、昔話なら書けるであろうとの配慮である。謹んでお受けするのが筋であるが、その話の筋がさっぱり浮かんでこないのに閉口している。昔話である限りは、読んだ方が「なんと、昔はそんなこともあったのか」と思われる印象深い話でない、わざわざ書く理由がない。まるつきりありもしないフィクションを書くわけにもいかなないので、わが身の苦労話でも書いて責めを果たしたい。

ことの発端は、昭和三十六年小児科大学院に入学した際、佐川教授から学位論文のテーマとして「未熟児の蛋白所要量」という、とてつもない大きなテーマを頂いたことに始まる。栄養学では大人や成長期の「蛋白所要量」はすでに教科書に記載されているが、未熟児について

はなんの記載もない時代で、未知の値であることはすぐに理解できた。しかし、大病院に一人の未熟児もおらず、身体に触れたこともないので、その成長に必要な蛋白所要量を掴むような課題で、全く途方に暮れていた。

しかし捨てる神あれば拾う神ありで、病棟主任であった谷口講師が「蛋白所要量は窒素出納法によって決めるものである」ことを教えていただいた。その原理は、「窒素原子(N)は糖質や脂肪に含まれないので食べたN量から尿、便、汗に排泄されたN量を引き算すれば、残ったN量が蛋白質が体内に蓄積した量となる。したがって未熟児が飲んだミルクのN量と尿・便に排泄されたN量を測ることによって身体に蓄積した蛋白量を知ることができる」というまことに明快な話であった。まさに五里霧中に曙光がさした思いであった。

とはいっても、窒素量をどのようにして測定するか、未熟児のミルクや便・尿をどのようにして調達するか、考えれば考えるほど、わが目標ははるか彼方に遠ざかっていった。そのとき天から降って沸いたように、耳寄りな話が飛び込んできた。今度着任された高木教授の生化学教室には、前任の岩崎教授が学士院賞をとられた「アツオトメーター」が全く使われずに残っているという情報である。早速生化学教室に赴き、なんとかそのアツオトメーターを使わせてもらえな

いとお願ひしたところ、貴重な宝物をこころよく払い下げていただいた。学士院賞を得た宝物で、尿や便の窒素を計る訳であるが、いまだ未知の蛋白所要量を見出すためとあれば、岩崎教授も許してくださるだろうと思うことにする。

もう一つの難問は未熟児であるが、難しいことに福井日赤病院小児科の富沢部長が、研究テーマに理解をせよとされ、未熟児のミルク、尿、便を集める作業を許してくださいましたことである。しかし窒素出納というからは、尿・便の一日排泄量を少なくとも三日間、集める作業が必要となる。唯でさえいそがしい未熟児室のナースにそんな作業をお願いする訳にはいかない、教室の先輩二人と私の三人組みで一日ずつ泊まりこんで、未熟児の便と尿を集める作業に取り組んだ次第である。

折しも外界は三八の豪雪時で、福井駅から日赤までの道には二mをこえる雪の壁が立て込めており、その中を尿瓶を何本も入れたリュックをかついで通った思

い出はちよつとしたドラマであった。雪中行軍の途中、頭の中にはいつも「両手を回して・・帰ろう・ゆれながら・・星屑の町を・・」という三橋美智也の歌のメロディがリフレインしていたのを懐かしく思い出す。

今から考えれば、谷口講師からの窒素出納法の教示、岩崎教授の残された「アツオトメーター」、そして日赤富沢部長の英断、この三つのどれ一つを欠いても、私の学位論文「未熟児の蛋白所要量について」は生まれることはなかったわけで、今もなお皆さんに感謝している。

3g/kgまでは、窒素蓄積との間にきれいな直線関係が認められ、蛋白質の占めるカロリー量が、すでに判明していた未熟児の必要カロリー量・120cal/kgの十%を超えると、窒素蓄積率が低下する」という結論が得られたことである。コッソツ測定をして集めたデータが示す自然の摂理の見事さに、我ながら感嘆した次第であった。

この仕事はその年の森永奉仕会賞を頂いたが、当時、森永乳業は「砒素入りミルク事件」を起こし、世間の非難の的になっていった。「そんな企業の賞金は返してしまえ」という声も学会内にあり、侃々がくがくの状況だったので、その賞金は関係者一同で、一晚のうちに飲んでしまった。わが心中では、豪雪の中を三人で福井まで通った仕事なので、私一人の学位論文となっているのも心苦しく、最後の打ち上げ花火はみんなで派手にブチあげて、清々した思いであった。

登場人物の大方は既にこの世を去り、話は追悼記に近いが、「学士院賞のアツオトメーターが生んだ筋違いの鬼つ子」とでもいふべき昔話の一席でした。



交感神経遮断との格闘記

上山 武史 (昭和三十四年卒業)

交感神経遮断による動脈血流増加を目的とする手術は血管外科領域では既に過去のものとなったが、昭和四十年頃迄は足趾潰瘍を伴う閉塞性血栓性血管炎（バージャー病）に対する腰部交感神経節切除は疼痛に苦しみ、睡眠不足になっていた患者には点滴や鎮痛剤投与に比し、血流増加が明瞭で有効であったため多用されていた。上級生が行う手術の第二、三助手として鉤で腹膜外から腸管を圧迫、排除して手術野を確保する役を幾度となくさせられた。腰椎に達し、椎体上側面にある神経節と思われる組織を摘除し、病理診に出すとリンパ節と返事が来る。もう一度、椎体の前面、側面を剥離し周囲組織を調べる。幾度か経験を積むと硬さ、走行、色調から神経節を見分けられ安定した結果が得られるようになった。

昭和五十五年から厚生省特定疾患としてバージャー病の疫学、発生頻度、分布、病態、経過、終末像などが検討された。私は富山医大に移った六十二年から同研究班に参加したが、初発患者は喫煙者が多い、交感神経遮断などにより小康が得られた患者も喫煙の再開により治療効果が消退することから、ニコチンとの親和性が強く疑われ、禁煙が指導されるようになり漸次減少していった。昭和四十年代に浅草で人気者だった喜劇役者エノケンこと榎本健一は喫煙を続け、疼痛から逃れるため酒に溺れ、右足趾切断

から始まり、最後は両大腿切断に至り、六十六歳で肝硬変により死亡したが、この病状進行に喫煙が大きく関係していたと考えられ、この経過を話すことが禁煙と非常に有効だった。

腰部交感神経節切除が有効なことから、手指潰瘍、激痛で悩んでいる患者に対し胸部交感神経節切除を行いたいとの願望が強かったが、当時は開胸手術に遡る傾向が強く、非開胸で脊柱と肩甲骨の間に皮切を加え、第三、四肋骨を胸椎より三、四センチ切除し、椎体側面の神経節を摘除する方法が行われた。しかし、しばしば開胸し、狭い視野での困難な手術であった。その後、肺尖部結核巣切除や自然気胸の縫縮手術に腋窩切開が導入され、肺尖を下方に圧排すると胸椎側面が良く観察され神経節を直視し、この切開法による胸部交感神経節切除が臨床応用された。私もこの開胸で交感神経節を見た時には、その視野の良さと手術の容易さに驚かされ、将来は内視鏡手術の良い適応になると感じた。

平成に入るとファイバースコープ、ビデオ装置、光源と外部からの手術操作器具が急速に進歩し、あらゆる領域で内視鏡的診断から治療へと一挙に進展し、これに刺激され胸腔鏡による交感神経遮断が各地で試みられた。平成四年、ドイツ、フランクフルトで開催された国際外科学会で、スウェーデンのクラス教授らが一本の内視鏡で胸部交感神経節を確実に遮断する方法の四百例余りの経験を発表した。私はクラス教授に手術を見せて欲しいと申し込み、承諾を得た。帰国後、当時、国立金沢病院心臓血管外科に勤務していた手取屋岳夫先生に一週間程手術見学に、スウェーデン、ボラス大学病院へ行ってもらった。彼の帰国後、待機していたバージャー病やレイノー症候群の患者に連続して胸腔鏡下交感神経遮断を行ったが、確実に胸部交感神経節を焼灼・ブロックできることを知った。彼はスウェーデンでの最大の手術対象は手掌多汗症であると話し、本邦にそんな患者が存在するかと疑問に思っていたが、ある医師の息子さんが手掌多汗で大学卒業後、事務的な仕事に従事していたが書類が濡れて汚れたり、破損したりするためうつ状態となり帰郷し農園作業を手伝っているが、やはり字を書くのに恐怖感を持つているとの話があり、この手術の良い適応でないかと説明し手術を決心してもらった。その効果は劇的で手術直後から顔が明るくなり、手を見せて喜んでもらえた。この経験を新聞に載せたところ、多くの患者が殺到し、平成六年八月以降は週に二、三例の手術が行われた。

初期には高位胸部交感神経節を遮断したためのホルネル症候群が出た人もあったが、第二神経節を遮断しないことにより、この発生は皆無になった。第三、四、五神経節遮断では腋窩発汗が残存、人によって増大することが生じたため三、四、五神経節遮断を行うようにし、安定した手掌発汗停止が得られることを知った。その後も施行例が増大し、平成十二年三月（二〇〇〇年）の定年までに三、四、五例に行なった。本内視鏡手術が従来の開胸手術に比し、両側同時に施行し得、効果が確実なことより、当時外保連

の委員長であった東京医科歯科大 三島好雄教授に強く保険の適応をお願いしていた。ちょうど、その時厚生省の方の息子さんがN.T.T東関東病院でこの手術を受け、その有効性を確認され、収載を強く支持されたこともあり一九九七年四月より保険採用になり、国内での施行例が急激に増加し、現在ではK 一九六一二胸腔鏡下交感神経節切除術として一八五〇〇点が認められている。

本手術施行後二〇年を経過すると、胸部交感神経節第三、四、五遮断で手掌発汗停止は確実に得られるが、後遺症として腹・臀部において発汗量が増大する代償性発汗に悩む人がいることが明らかになってきた。これらの患者は夏期、三〇度以上になると突然発汗量が増大し、その対応が愁訴になる人が5%近く存在する。この代償性発汗の発症状態より、現在では本手術を寒い時期、九月から三月頃までに行い、気温上昇による代償性発汗を経験した上で夏期を迎えるようにしている。その他、飲水量を減らす、薄着をする、発汗を認めた時には早めに汗を拭うなど対応策を説明し、同時に発汗量は経過と共に減少し、五年後には殆ど人は気にならなくなると話し安心させるようにしている。

今後はより通常の生活を送れるよう各自に適応した手掌発汗停止と代償性発汗量を抑制しうる手段を研究すべきと考えられている。

「医に心を、心に徳を、」

医学類四年 学年代表 小川 宜彦

「子曰、人而無恒、不可以作医。不恒其德、或承之羞。」恒其徳とは。今から私をご説明しましょう。なんて洒落たことを申せたらば、医学部にはないだろう、ともすれば、この私が六法全書を繙いていたかもしれない。微積分、単振動、化学反応、英文読解。そして、ちよつとの古典知識、皆無に等しい活字を読む力、著書と著者の組み合わせを覚えて解つたような氣でいる倫理。これが私を金沢大学の医学部の学生たらしめた、私の脳内基本構造である。大学生生活四年目にして、いざ、この論語の一節の解釈を、三つ目の話を糸口に挑む。

一つ目の話は東日本大震災。私は全学の旅サークルに所属している。震災の一年前、当時一回生だった私は松島遊覧、「牛たん炭焼 利休」、中尊寺金色堂と、東北旅行をエンジョイしていた。地震は半年後の三月十一日に起きた。瓦礫、津波、火災に飲まれる人々がテレビに映し出された。暖房の効いた部屋で、自然の猛威を伝えるテレビを前にし、握る両手を震わせた。

小さな瓦礫で農作物を育てることができない状態だ。農家の方々の仕事場を取り戻すべく、瓦礫を一つずつ拾つた。拾つた泥まみれのネガフィルムを東北の太陽に照らしてみる。恋人だろうか、家族だろうか。そこにはたくさんの笑顔があった。海水でやられた田の土に、私は少ししよっぱい水を落としてしまった。ポラントニアセンサーで七ヶ浜町の人々と出会つた。震災を生きる人々とは思えぬ心の温かさと明るい声、そして生きる強さを感じた。嗚呼、「其の徳を恒にす」か。今年の九月、四回生となった私は百瀬と再び東北の地へゆく。七ヶ浜町に稔りの日が訪れるまで。

二つ目の話は美しき地球、海、山。子どもの心、瞳つて綺麗だなと思う。誰にもそんな時代があつたはず。僕はなぜ生まれてきたのだろうか。僕を自分だと思ふ僕はどこにあるのだろうか。ブランコを漕ぎながらそんなことばかり考えていた小学生時代。心の綺麗な子どものみぞ考へる輩なのか。氣付けば、人との関わりやルーチンワークに追われる喧騒の世界で、私は考えることを止めていた。五感が研ぎ澄まされ、自分を見つめ、「考える」ことができる場所。それは海と山だ。

は心のビデオテープを少年時代に巻き戻してくる。魂が震えるような感覚。そして、私はそこで「考える」ことができる。今年の九月、能登の海を潜る。

山。私を育ててくれた石川県の「霊峰白山」を、知己と別当出合よりゆく。澄んだ空気、疲れを癒す冷たい雪解け水、夏の青い山に映える黄色のニッコウキスゲ。自然のエネルギーに背中を押され、主峰「御前峰」を目指し砂防新道をどんでんゆく。頂上に立つ。広がる雄雄しい山々、それは子どもをやさしく包む女性の如く寛い。雲、切り立つた崖。この惑星は美しい。「考える」ことができる。マッターホルンの頂きから、この世界はどう見えるのだろうか。

海と山は、子どもの頃のように考えることができる故郷。今の自分に一番必要なものを見つめることができる書齋。海と山は、いかに世のための自分となつてゆくかを考える、愛と徳をうむ場所なのだ。

三つ目の話は縁。生まれて最初に出会つた母。親友や恩師、反りが合わない友人や苦手な教授。行きつけのBARのマスター。七ヶ浜町のボランティアで出会い、生涯ボラ友を誓つた滋賀の大学生。白山の頂上で知り合つた山友の青年。

今年度より、エフエム石川の「StudentsJam」という、学生の活動を紹介する番組のアシスタントMCをさせていだいてくれているのだが、「Cosmos」や「E2」というコーナーで毎週のトークテーマに即した、その道のエキスパートをゲストに招き、学生と共に多彩な話題を展開している。このラジオ番組を通して、世代の違う人や他大学の学生との出

会いを紡いでゆく。生涯でどれだけの人と人生と交わるのか。そしてこの出会いは一期一会か。

「二期一会」をことわざ辞典で引いて、茶道の心得から出た言葉と知る。仮に何度主人と客としての関係を持とうとも、その日の出会いは一生にただ一度だけのものと心得て交わるべき。なるほど、あの出会いを一期一会と思うのではなく、一期一会の気持ちで人と時間を共有するのだ。簡単なようで難しそうである。「明日、地球が滅びようとも 今日、私はリノゴの木を植える」というルターの言葉をふと思ひ出す。今日という一日との一期一会。学生という猶予期間をどう生きるか。私はこう考える。すべてのヒト、モノ、コトとの出会いが縁であり、その縁と一期一会の気持ちで向き合う。今日という万人に均しく与えられた時間をどう過ごすかを考え毎日を生きる。すべての縁を自分にとつて善き縁としていきたい。

孔子は何を言わんとしたのか。「子曰く、人にして恒なければ、以て医と作るべからず。其の徳を恒にせざれば、或いはこれに羞しめを承けん。」分かつたフリしかできぬ四回生の私。これから医師となり、夫となり、父となり、祖父となつていく。その人生という一度きりの死に向かう旅すがら、「医」を究めるべく研鑽を積み、そして、「徳を恒にする」ことができる自分となつてゆけるよう、日々考え続けたい。

現在、深夜三時。今日もお気に入りの「Year note」という高級安眠枕が、色々を考へる間も与えず、私を深い眠りの世界に誘つてゆく。

二〇一三年度 医学展開催に向けて

昨年に引き続き、今年度も十一月二、三日に医学展を開催することが決定致しました。二〇一三年度医学展開催に向けて、同窓会の皆様方にはご支援ご協力を賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

昨年度は金沢大学医学部創立百五十周年を迎え、医学展も例年以上に盛大に開催されました。医学展の歴史は古く、昭和二十七年の官立金沢医科大学時代に始まります。その当時から現在に至るまで、医学展は常に医学を発信し、また私達学生が日頃学んでいる医学を見つめ直すことのできる場でありました。今年度もそのような医学展を開催できることを非常に嬉しく、有り難く思っております。

二〇一三年度医学展開催に向けて、医学展をより医学を発信できる場としたい、より来ていただいた方に楽しんで欲しい、より地域の方や学生間で交流したい、そういった想いを込めて、私達医学展実行委員は「MORE!」というテーマを掲げました。今まで行ってきた病院見学や健康チェック、内視鏡体験に加え新たに、昨今話題となっているiPS、ES細胞の展示や、救急車を展示し救急救命士の仕事を実際に身体を動かして体験するなど、今までに無かった企画も多数予定し、来ていただいた方に医学をより身近に感じてもらえるよう、全体として体験を重視した企画となっております。またステージ企画では、劇を交えながら医学に触れもらえる企画を予定し、他の文化祭で

は味わうことのできないような「医学」展にしたいと考えております。模擬店においても、石引商店街の方にも出店していただき、地域の方と学生が交流できる場となつて欲しい、と考えております。

一学生に過ぎない私個人の意見を書いておこがましいのですが、医学・医療とは人々の日々の生活と切り離せないものであり、それ故にオープンなものでなければならぬ、と考えます。学生のうちから地域の方の想いを聞くこと、経験豊富な先生や、将来共に働くこととなる学生同士で交流すること、これら全てが医

第七回 金沢大学 ホームカミングデー

今回で七回目となる、「金沢大学ホームカミングデー」を十一月二日(土)に開催いたします。また、昨年から始めました「留学生ホームカミングデー」を、今年も同日に開催いたします。学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

ホームカミングデー当日は、「第五十回金大祭」(十一月二日(土)～十一月四日(月))の開催期間中であり、「ふれてサイエンス&てくてくテクノロジー」、「医学展」も開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。さらに、この日には、創基百五十年記念事業の締めくくりである「創基百五十年記念植樹式」を行います。

記念懇親交流会(参加費無料…先着三百名)は、角間キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながら、お気

学・医療に対する理解につながり、地域の一部となつて人々の生活を支えていくことができると思っております。

このような機会を与えていただいたことに深く感謝しつつ、学生として今何ができるかを考えながら、貪欲に取り組んでいく所存でございます。お忙しい中恐縮ですが、足を運んでいただけてますと幸いです。末筆ではございますが、日頃からのご支援、ご鞭撻に感謝してご挨拶とさせていただきます。

(医学展実行委員会 委員長
五年 相馬 麻由子 記)

軽にご参加いただけるよう、企画しております。

ご家族や同期生、サークル仲間のみならずとご一緒に、晩秋の金沢へどうぞお越しください。

- ◎参加費…無料
 - ◎申込み締切…十月十八日(金)
 - ◎申込み・プログラム等の詳細は左記まで
- TEL 〇七六―二四六―五〇八一
FAX 〇七六―二三四―四〇一〇
メール gakyu@adm.kanazawa-u.ac.jp
(学友支援室長 上地 進 記)

10:30~13:00 留学生ホームカミングデー (会場:角間キャンパス)
11:00~11:30 創基150年記念植樹式

受付 角間キャンパス 自然科学本館 アカデミックホール

13:00 受付開始

14:00 第七回ホームカミングデー歓迎式典
会場:角間キャンパス自然科学本館
・金沢大学校歌斉唱
・学長挨拶
・学友会会長挨拶
・名譽客員教授称号授与
・教育に係る学長表彰
・学生への学長表彰
・高懸寄附者の紹介

15:00 記念講演 山内 雅壽氏
ヤマト運輸株式会社代表取締役社長(昭和59年文学部長)

16:00 学友会第3回役員総会

16:30 記念懇親交流会 大学主催(参加費無料)
会場:角間キャンパス南福利(自然研)食堂

18:00 石川門・香林坊・片町・武蔵・JR金沢駅方面へバスで移動(希望者)

写真展「よみがえる城内キャンパス」 10月25日(金)~11月7日(木) <金沢駅公園>

編集後記

このたび、本編集委員にお加えいただき十全学術行脚(福井大学)に協力させていただきました。金沢大学医学部は百五十周年を迎えておりますが、福井大学医学部は三十周年を越えたところでございます。今回の編集では、福井大学にいらつしやいます先生方が悪戦苦闘して百二十年の格差に挑んでいるお姿を垣間見させていただきました。伝統には良い面とそうでない側面があることは勿論でございますが、金沢を離れておりますと年月をかけてしか創ることのできないもの、例えて申し上げれば、兼六園の龍石に生える苔、のような母校の歴史が織りなす無比の凄さを改めて認識している次第でございます。やはり、そこには諸先輩方が百五十年をかけて築いてこられたものがあり、そのようなものを築くには少なくとも百五十年という歳月が必要なのでしょう。先人の多くの失敗に基づかなければ、後から挑戦する者がそれを乗り越えて成功に到達することはできません。その意味でもとくに歴史の浅い大学においては、学内の診療、研究、教育をしっかりと高めて、学外や地域との連携をじっくりと構築していくことの難しさを日々感じております。このたびの折りに触れまして、日常のことに流されてしまふようになりながらも、付け焼き刃ではなく絶対に崩れることも朽ちることもない伝統をひとつひとつ積み上げて行くことの重要性を再度認識させていただく機会となりました。深く感謝を申し上げますと存じます。最後になりましたが、十全同窓会会員の皆様におかれましては今後の益々のご発展とご多幸を切にお祈り申し上げます。(中本 安成 記)